京都府立大学学術報告（人文・社会）第54号　(2002年12月)

ジェームズ・ピットマン卿の夢
—「初期指導用アルファベット」考案までの伝記的スケッチ —

山　口　美知代

1　はじめに

1.1　四十年後の「初期指導用アルファベット」

1.1.1　四十周年回顧記事

"A cleer case of educashunal lunacie"（明白な教育的愚行の事例）。

イギリスの新聞『デイリー・テレグラフ』紙のウィークエンド版2001年6月2日付で，教育問題を扱う分冊の第六面を飾ったこの見出しには，"clear"ではなく"cleer"，"educational"ではなくて"educashunal"，"lunacy"ではなく"lunacie"という「誤った」綴りが使われているが，これは読者の注意を引くためのアイキャッチャー効果を狙うことだけが目的だったわけではない。記事の書き手レイチェル・ジョンソン（Rachel Johnson）[1]が「明白な教育的愚行」と断じて論じている事柄が，まさに，こうした通常は用いられない綴字を初等教育に導入しようと，1960年代にイギリスで行われた実験的試みだったからだ。正確にいうと，導入されたのは通常用いられない「綴字」だけではない。英語のアルファベットにはない「文字」も含んだ合計44文字（考案当初は42文字）からなる「拡大アルファベット」を，初等教育における読み書き指導に用いようという計画だったのだ。

当時このアルファベットを推進するために作られたパンフレットに載せられた例文を見てみよう。

humpty ɖumpty
humpty ɖumpty sat on a waull.
humpty ɖumpty haɖ a græt faull.
aull ʧe kiŋ's horseʒ anɖ aull ʧe kiŋ's men
cωɖn't pωt humpty ɖumpty tωgeʧer agæn.

これは通常の綴字で書くならば，

Humpty Dumpty
Humpty Dumpty sat on a wall.
Humpty Dumpty had a great fall.

All the king's horses and all the king's men

Couldn't put Humpty Dumpty together again.

となるべきところである。

用いる文字としては通常のアルファベット二十六文字のなかから“q”と“x”の二文字が省かれ，その替わりに以下の二十文字が付け加えられた。

ɑ æ au ʤh ee ie ŋ œ ω ɷ ou oi
r ʃh ʒ ʧh ɹh ue wh ʇ

文字の数を増やしたのは，それによってできるだけ英語の表記を一音一字の原則に近づけ，綴字から音が推測しやすいようにすることで，初学者の読み書きの学習を容易にするためである。学習者として意図されていたのは，一義的には英語を母語として話す能力を持ち，読み書きを習い始める段階にある子供，つまり，初等学校（primary school）の最初の三年間（infant school,「幼児学校」）に在学する五歳から七歳までの子供であり，外国語もしくは第二言語としての英語学習者はあくまで二義的な存在であった。こうした教育的目的のために考案されたこのアルファベットは「初期指導用アルファベット」（initial teaching alphabet, i.t.a.）と呼ばれる。

使用文字のなかで，現行のアルファベットからqとxが省かれたのは一音一字の表音原則に馴染まないからで，同じ理由でcも最初は省かれていたが，後に妥協案として戻された。また追加された文字は，通常の綴字で使われる二重字（digraph），つまり二文字で一音を表す“ch”，“ee”，“ng”などを一文字だけで表すために考案されたものであり，そのデザイン（順に，ʤh ee ŋ）は二重字との類似点をかなり残している。このほか，大文字と小文字の両方を覚える労力を減らすために，小文字だけを使うというのもこのアルファベットの特徴である。子供達は，初期指導用アルファベットを使って，読み書きにおける流暢さと自信を身につけた後，通常の正書法に移行することになる。この移行については「伝統的正書法とこのアルファベットの綴字は，よく似ているので，移行に際しては大きな問題は起こり得ない」[2]とされた。七歳になって「小学校」(junior school，七歳から十一歳まで)[3]に進むときには，通常の綴字への移行が完了している，というのが基本的なスケジュールであった。

初期指導用アルファベットの考案者は，アイザック・ジェームズ・ピットマン卿（Sir Isaac James Pitman）。1901年に生まれ1985年に亡くなった。十九世紀に表音式速記を改良し普及させたアイザック・ピットマン卿の孫にあたり，祖父が起こした出版社の三代目経営者として実業に携わるかたわら，下院議員も二十年近く務め，それらの功績から1961年ナイト爵の称号を受けている。祖父アイザック・ピットマンの考案したピットマン式速記「フォノグラフィー」（Phonography）は，現在でも「グレッグ式」と並ぶ代表的な英文速記法で，例えばバーナード・ショーなどもピットマン式速記で原稿を書いていた。明治初期の日本語速記考案に際しても，ピットマンのフォノグラフィーが直接，間接に与えた影響は，小さくない。アイザック・ピットマンは速記改良，普及の功績から，晩年ナイト爵に叙されており，バース市における彼の住居には，記念の銘文が残っている。「ピットマン」と言えば「速記のピットマン」と人々が容易に連想す

るほどの祖父アイザックの名を，孫のアイザック・ジェームズ・ピットマンは名実共に背負って生きていた。もっとも，祖父との名前の混同を避けるため，ファーストネームのアイザックは用いられず，ジェームズ・ピットマンまたはジェームズ卿として一般に通っていた。従って本稿でもアイザックは使わず，ジェームズ・ピットマンと記す。さて，そのジェームズ・ピットマンが後半生を捧げたのがこの初期指導用アルファベットであった。

さて，このアルファベットは1961年に英国の21校の初等学校（＝幼児学校＋小学校）で実験的使用が始まり，その効果が認められたため，用いる学校が他にも出始めた。1969年には9%の幼児学校で使われていたという報告もある[4]。しかし，1970年代になると次第にこの勢いは衰えはじめ，採用する学校も減り，1980年代にはごく一部の熱心な支持者をのぞいては使用するものはいなくなった。その後1980年代後半，教育界にとどまらず社会的に大きな議論を呼んだナショナル・カリキュラム導入においても，そしてその流れのなかで強化されるようになった読み書き教育政策においても，もはや初期指導用アルファベットが取り上げられることはなかった。昨年，新聞やラジオなどで久しぶりにその名前が現れたのは，2001年が，1961年の初期指導用アルファベット実験的使用開始から，四十年経った区切りの年だったからに過ぎない。すでに歴史のひとこまになったものとして，回顧の記事や番組が作られたのだ。たとえば，インターネット上でBBCが発信しているBBCニュースの2001年9月5日の版は“Educashunal lunacie or wizdom?”というタイトルで初期指導用アルファベットの特集をし，実際に初期指導用アルファベットで教育を受けたひとの体験談，思い出話を電子メールで受付け，公開している[5]。また同日，BBCラジオは綴字法簡略化協会の会長ジョン・グレッドヒル（John Gledhill）を迎えてインタビュー形式で，初期指導用アルファベット四十周年番組を放送した[6]。

これらの回顧記事，回顧番組は大体において，初期指導用アルファベットに批判的である。たとえば冒頭で紹介した『デイリー・テレグラフ』の記事では「カフカ的拷問」，「悪名高き教育的大失敗」，「読み書き教育の歴史に残された奇妙な一章」，「あり得ないような空理空論」といった語句を使って，初期指導用アルファベットを使った読み書き教育について振り返る。このアルファベットで読み書きを学んだが，通常の綴字への移行で躓いたために，その後の学習一般において，大きなダメージを受けた，というような当時の学習者や保護者の体験談，証言も紹介されている。インターネット上のBBCニュース（2001年9月5日付け）も，BBCラジオの番組内容スクリプトも，『テレグラフ』記事ほどではないにせよ，批判的な調子を隠さない。

また，綴字改革に関しては九十年以上の活動の歴史を持ち，一時は初期指導用アルファベットの強力な支持母体のひとつであったイギリスの綴字法簡略化協会（Simplified Spelling Society, SSS）は，四十年後のこの年の協会ジャーナルに「i.t.a.実験の意味」という論考を掲載しているが，そこでもこうした批判的見解に正面からの反論がなされているわけではない。筆者のマーシャ・ベル（Masha Bell）は「i.t.a.実験は，今では一般に，失敗だったと見なされている。2001年6月2日の『デイリー・テレグラフ』に一面使って掲載されたi.t.a.についての記事には『明白な教育的愚行の事例』という見出しがついている。そもそもなぜi.t.a.が使われることになったのかわか

るひとはほとんどいない」[7]という書き出しで始め，初期指導用アルファベットの歴史的背景，経過や，その消極的な意味を説明はするものの，最後まで「明白な教育的愚行の事例」という評価に対して反論は試みていない。

なるほど，現在の目で初期指導用アルファベットをふり返ってみると，最初に一つのアルファベットを学び，それから別の(通常の)アルファベットへ移行するのは大変ではないか，というのが常識的な感覚であろう。初期指導用アルファベットが目指したのは，根本的な英語の綴字改革ではなく，最終的な目標は通常の正書法を習得することであった。徹底的な改革案ではなくて，ある種妥協的な移行案は，結局効率の悪いものにも思える。そうした感覚をもってこうした批判的回顧記事を読んでいると，正に，いったいなぜ初期指導用アルファベットというようなものが公教育に導入され得たのか，という疑問がわきあがってくる。私自身の初期指導用アルファベットに対する問題意識の出発点も，こうした素朴な疑問であった。

ところで一方でこれらの回顧記事，回顧番組スクリプトを再び丁寧に読んでみると，そこで展開されている初期指導用アルファベットについての議論，そして下されている評価が，必ずしも正確な理解に基づいているわけではないことにも気付くのだ。たとえば，冒頭で引用した『デイリー・テレグラフ』記事は，初期指導用アルファベットの考案者であるジェームズ・ピットマンと表音式速記改良者だった祖父アイザック・ピットマンを混同し，「ピットマンの初期指導用アルファベットを考案したのは，全ての駆け出しジャーナリストの頭痛の種である，あのピットマン式速記を考案したピットマン氏である」と間違ったことを書いている[8]。また不正確といえば，見出しに使われた“A cleer case of educashunal lunacie”にしても，実は初期指導用アルファベットとは関係のない綴り方であり，単に通常とは違った綴字を使っているに過ぎないという点で誤りといえる。また，インターネット上のBBCニュースは，アイキャッチャー効果を狙ってか，冒頭に大きなフォントの初期指導用アルファベットで綴られた英単語八語からなる短文を載せ，読者に何と読むか推測させようとしているが，それが初期指導用アルファベットの表音原則には従っていない代物なのだ。そこで「正解」とされているのはthe ice angel gave the owl a ring. というナンセンスな文で，これが選ばれたのは，初期指導用アルファベットのなかでも，通常のアルファベットと異なり方の大きい文字を，多く使って見せるためであろうと思われる。しかし，肝心の初期指導用アルファベットの綴り方が二カ所で間違っていることは，記事全体の信憑性に負の効果をもたらすものである[9]。こうした記者の側における明白な無知，誤解を目にするとき，同時に，これらの批判的記事だけを全面的に鵜呑みにして初期指導用アルファベットをふり返ってはいけないという思いがおこってくる。

1.1.2 英語学史的記述

このように四十周年記念に初期指導用アルファベットをふり返るときには，やはり教育的な効果や意義が記述，評価の中心となることが多いようであり，これはこのアルファベット考案の目的，そして実験の性質からいって当然のことと言える。しかし，1960年代のイギリスを中心と

した初期指導用アルファベット実験という現象が，今日の私達にとって何らかの意味をもつとしたら，それは教育の視点からのものだけではない。英語学史的に考えても，非常に興味深い現象だと言えるだろう。つまり，英語における文字と音価，綴字，正書法の問題点について，ある時代のある人間が出したひとつの答えとして，歴史的な位置づけを確認するに値する現象だといえるのだ[10]。

こうした視点からはすでにいくつかの試みがされている。たとえば，1978年出版の仏語原著の邦語訳が近年出版されたジョルジュ・ブルシュの『英語の正書法ーその歴史と現状』では第五章「正書法改革への計画と試み」の第四節「ピットマン卿（James Pitman）の初期指導用アルファベット（'I.T.A.'）」が正書法改革の一案としての位置づけを論じている[11]。また，英語について人々が抱いているイメージの変遷を文化史的に記述したリチャード・ベイリー（Richard W. Bailey）の『英語のイメージ：その文化史』（*Images of English : A Cultural History of the Language*）では，第七章「改良される英語」で綴字改革を略述するなかで，このアルファベットを位置づけている[12]。そして，共時的な視点で英語の綴字における諸問題を包括的に扱ったエドワード・カーニー（Edward Carney）の『英語綴字概説』（*A Survey of English Spelling*）でも，最終章第七章「標準化と綴字改革」（Standardization and spelling reform）の一番最後の部分で，初期指導用アルファベットを論じている[13]。

初期指導用アルファベットは綴字改革ではなく教育用の一時的な簡易綴字だ，と考案者ジェームズ・ピットマンがかなり意識的に強調していたにもかかわらず，後年の研究者は，それは承知しているが，と断りながらも綴字改革の流れのなかでこのアルファベットを論じている。というのも，ピットマン自身が初期指導用アルファベットの目的を何と説明しようが，その発想の根幹にあるのは英語の綴字改革者たちが幾多の案を出しながら考えてきたことと同じだからだ。つまり，完全には表音的でない英語の正書法への不満と，それをより表音的に変更することで英語は「改良」され，英語使用者は恩恵を受けるはずだ，という信念である。しかも，ピットマンの案は，たとえ一時的なものだったにせよ，一定の社会的影響力を持った。彼の言語改革の夢は，暫時であるにせよ現実のものとなり，単なる夢想で終わらなかったのだ。これは綴字改革の歴史のなかに初期指導用アルファベットの試みを位置づける充分な理由となろう。

さて，以上，昨年四十周年を迎えた初期指導用アルファベットについて，教育方法としての評価を前面に出したジャーナリズムの扱いと，綴字改革の一変種として位置づける英語学史的扱いを紹介したが，本稿で私が採るのは，そのどちらとも異なり，考案者ジェームズ・ピットマンの伝記的記述という方法である。次節でその理由を述べたい。

1.2 本稿の目的

本稿において私が，ジェームズ・ピットマンの生涯を綴字改革および初期指導用アルファベットに力点をおきながら伝記的にスケッチする，という方法を試みるのは，以下の二つの理由によ

る。

まず第一は，初期指導用アルファベットについて調べるなかで，私が最も理解に苦しみ，また知りたいと思っても答えを得られなかったのが「どうして，このアルファベットを使った，無謀とも思える実験が，一時期であるにせよ，かなりの規模で可能だったのか」という素朴な問いであることに端を発する。この問いに答えるためには，初期指導用アルファベット自体だけでなく，その背景にあった当時の社会的，文化的事情などを，多面的に分析する必要があるだろう。

初期指導用アルファベットを，音声学，音韻論，文字と音価の関係の視点から理論的に分析した先行研究[14]がこのアルファベットに下した評価を見れば，このアルファベットが理論的に卓越していたので影響力を持ったわけではない，ということがわかる。そして，私達は，理論的に優れた案が必ずしも社会的影響力を持つとは限らないことも知っている。それでは，案自体の理論的影響力ではないとすると，次に考えられるのが，考案者ピットマン卿自身が持っていた社会的影響力であろうか。この点は，綴字改革の観点から初期指導用アルファベットを論じた研究では，あまり詳しく述べられていないが，伝記的事実を調べることによってある程度明らかになるのではないかと考える。

また，初期指導用アルファベットについて言及した文献中にジェームズ・ピットマンを紹介するときに，枕詞のように「速記改良者として有名なアイザック・ピットマンの孫」，「ピットマン式速記の考案者アイザック・ピットマンの孫」といった祖父へ言及する修飾句が使われることについても，どこか釈然としない思いが残った。なるほど，アイザック・ピットマンはピットマン式表音速記考案者として，その功績ゆえに晩年ナイト爵を授与されたほどの人物である。伝記も何冊も出版されており[15]，速記関連書も数多い。また，アイザックが十九世紀のイギリス音声学に与えた影響は，A. J. エリス(Ellis)と交流があり共同で綴字改革案を構想したという事実にとどまらないものがあることは，後年アバークロンビー（David Abercrombie）によっても詳述されているところだ[16]。しかし，それにしても，祖父が表音式速記や綴字改革で有名だったという事実が，ジェームズにとって，公教育機関に自分の考案した新しいアルファベットを使用させうるほど大きな影響をもつのだろうか，持つとすればジェームズ・ピットマン自身がそれをどのくらい自覚的に利用していたのか，という疑問もある。この点についても，伝記的アプローチが有用であるように考えた。

第二の理由は，第一の理由から派生した実際的なもので，上で述べたようにジェームズ・ピットマンについての伝記的事実を調べようと思ったときに，適当な文献がなかったというものである。ある程度まとまった伝記的記述として『ディクショナリー・オブ・ナショナル・バイオグラフィー』(*Dictionary of National Biography*，以下 *DNB* と略。)はある[17]。しかし *DNB* の記事はジェームズ・ピットマンの実業家としての側面を重視してとりあげており，綴字問題への関心および初期指導用アルファベット考案，推進については紙幅の約四分の一しか割かれていない[18]。これは「Pitman, Sir (Isaac) James 1901-1985」の項の書き手，ヒュー・ローソン・ジョンストン氏（Hugh Lawson Johnston）が，ジェームズの妻マーガレット・ボーフォト（Margaret Beaufort）の弟にあ

たること，及び，ジェームズが実業家としての事業展開において，岳父である初代ルーク男爵のジョージ・ローソン・ジョンストン氏，つまり記事の書き手の父から大きな協力を得たことと無関係ではないだろう。

なお，*DNB* 以外にも，新聞記事やパンフレットなどに伝記的概略の断片を見つけることはできる。たとえば1985年にジェームズ卿が亡くなったときにタイムズ紙に掲載されたアーチボルド・クラーク=ケネディ氏（Archibald Clark-Kennedy）による死亡記事は，副題が「初期指導用アルファベット推進者」（Proponent of Initial Teaching Alphabet）となっており，記事の後半がこのアルファベットについての記述となっている。しかし，新聞の死亡記事ということもあって分量的な限界は否めない。また邦文文献としては『英語学人名辞典』の「Pitman, Sir Isaac」の項に「また彼の孫 Sir（Isaac）James Pitman（1901-85）も綴字問題に熱心で」と数行の記述があるくらいで[19]，詳述した文献はないようである。そこでジェームズ・ピットマン卿の伝記的事実の記述を通じて「初期指導用アルファベット」理解への一助としたいと考えるものである。

論考の資料として用いるのは主として英国バース大学図書館所蔵のピットマン書籍コレクション中の書籍，パンフレット類，および同図書館ピットマン・アーカイブ所蔵文書を中心とする新聞，雑誌記事，信書，その他の文書である。

ここで，このコレクションおよびアーカイブについて簡単に説明しておこう。1970年代以降にジェームズ・ピットマンが寄託したピットマン家関連書籍と文書は，ピットマン書籍コレクションとピットマン・アーカイブに保存されており，書籍コレクションの5398冊を収録したカタログはインターネット上で検索可能である[20]。これらの書籍はそもそもジェームズの祖父アイザック・ピットマンが速記に関する書物を中心に集め始めたもので，一時は速記書誌学者ウィリアム・J・カールトン(1886-1973)の手による独特の分類法で整理されてロンドンにあるピットマン社のピットマン・ハウスに保管されていたが[21]，その後ジェームズによってピットマン家からバース大学に寄贈された[22]。ピットマン家からは今も引き続き不定期な書物寄贈があり，2002年8月，私がバースの図書館で本稿の準備をしていたときにも，偶然，ジェームズ・ピットマンの長男ピーター・ピットマン氏夫妻が数箱の初期指導用アルファベット関連書籍を寄贈するため姿を見せるという場面に遭遇した。

一方ピットマン・アーカイブのほうは書籍コレクションに比べて整理がかなり遅れている。寄贈は1970年代後半から順次行われていたが，本格的な整理が始まったのはこの数年のことで，まだ終了していない。文書類は大きく六つに分類されており，A.ピットマン家の構成員（Pitman Family Members），B.表音式速記の起源と発展（Origins & Development of Phonographic Shorthand），C.ピットマン社ビジネス（Pitman Business），D.新しい英国アルファベット・コンクール（New British Alphabet Competition），E.初期指導用アルファベット（Initial Teaching Alphabet），F.綴字改革（Spelling Reform）からなる。このうちAの家族構成員に関する文書と，Dの新しい英国アルファベット・コンクールに関する文書は目録化が完成しており簡易製本されている。またE

の初期指導用アルファベットについては，1800点近い文書に番号が付けられ，それぞれの内容詳細が列挙されてはいるもののそれ以上の分類はまだである。そして，B，C，Fの三分類についてはまだ内容記述の途中段階である。

さて本稿では，こうした資料に基づきジェームズ・ピットマンの生涯を，初期指導用アルファベット考案までを中心に記述する。第二章で生い立ちから実業家，政治家としての確立までを描き，第三章では第二章で扱う年代と重なる部分も含めて，彼の綴字問題への関心がどのように発展してきたのかを述べる。第四章は初期指導用アルファベット考案について述べる。第四章で扱う初期指導用アルファベットについては，本稿では，考案及び実験の初期段階に触れるにとどまらざるを得なかった。ジェームズ・ピットマンの生涯に注目するそもそもの動機が初期指導用アルファベットであることを考えると，この構成は矛盾しているように思われるかもしれないが，上述のように本稿執筆の時点において，ピットマン・アーカイブのなかで初期指導用アルファベットに関する文書はまだ部分的に未整理であり，今回の調査のなかでは，こうした状態の文書を閲覧するだけの時間的余裕が筆者になかったことが一番大きな原因である。また初期指導用アルファベットはとくにその普及に関して組織的な広がりが複雑さを見せており，アーカイブ文書以外にも調査すべき資料が多数ある。こうしたことから，初期指導用アルファベットの普及活動とその衰退については，稿を改めて論じることとし，本稿では初期指導用アルファベットにいたるまでのジェームズ・ピットマンの綴字問題への関心のありかたと活動を論じる第三章，および初期指導用アルファベット考案までを論じた第四章を中心としたい。

2　生い立ちから実業家，政治家としての確立まで

2.1 生い立ちと教育

後のジェームズ卿こと，アイザック・ジェームズ・ピットマンは1901年8月14日，ロンドンで生まれた。ファースト・ネームはアイザックであるが，前述のようにミドルネームのジェームズ，およびその愛称のジムが一般に使用されていた。1961年にナイト爵（K. B. E.）を授与されたときにも，当初はSir Isaacという呼称も使われたが，祖父が同様に晩年ナイト爵を受けSir Isaacとなったこととの混乱を避けるため，また，幼少のころから「ジム」として通っていたために，自分でSir Jamesという呼び方を敢えて選んだという[23]。

幼少期はサマセットシャーのバースで過ごす。ローマ人の浴場に端を発し，十八世紀にヨーロッパ屈指の温泉保養地，そして社交の地として大きな発展を遂げたこの地は，ジェームズの生きた二十世紀には，もはや流行の地ではなかったが，歴史ある美しい町並みと文化を湛えた由緒ある古い町であった。またここは，祖父アイザックが1839年に移り住んで以来，ピットマン家の居住地となった町で[24]，のちにジェームズが下院議員として選出され，二十年近く議員活動を続けた地でもある。ピットマン家ゆかりのこの町を彼は非常に誇りに思っていた。後年，まだ出来たばかりのバース大学の学長代理（Pro-Chancellor）を務めたとき（1972-1981年）も，バースとい

う素晴しい町の歴史が優れた教授陣を引きつけるはずだから，大学の質は必ず高くなるはずだ，と家族に語っていたという[25]。バースの代表的建築のひとつであるロイヤル・クレセントの一角，十七番地は，アイザック・ピットマンが最晩年を過ごしたところで[26]，没後の1901年7月15日にバース市コーポレーション（The Corporation of the City of Bath）から贈られた「アイザック・ピットマン卿この地に暮らす」という記念銘板が，今も外壁に残っている[27]。記念銘板に刻まれた祖父の名は子供心にも深く刻まれたに違いない。

ジェームズが生まれたのは祖父アイザックが1897年に亡くなってから四年後の1901年のことなので，祖父に会ったことはない。しかし，祖母イザベラは存命であり，耳の遠くなった祖母の家に何度も遊びに行ったことは，はっきりと記憶に残っていたという[28]。

ジェームズは，オックスフォードの寄宿制私立小学校サマー・フィールズ校から有名パブリック・スクール，イートン校へ進み，そしてオックスフォード大学の名門学寮クライスト・チャーチ・カレッジへ進学した。経済的理由から十三歳でグラマー・スクールを去り，仕事に就かなければならなかった祖父や，バースのカレッジに進学した父と比べるまでもなく，ジェームズが受けたのは絵に描いたような英国エスタブリッシュメントのエリート教育である。祖父の名声，父の実業の成功のもとで，彼が極めて恵まれた子供時代を送ったことがうかがえる。父，アーネスト・ピットマンはアイザック・ピットマンの次男で，兄である長男アルフレッドとともにアイザックの起こした速記関連出版事業を引き継ぎ，サー・アイザック・ピットマン・アンド・サンズ社（Sir Isaac Pitman & Sons, Ltd.　以下，ピットマン社と略）としてさらに大きく発展させていた[29]。

ジェームズ・ピットマンの大学での専攻は近代史で，卒業成績はセカンド・クラス・オナーズということだから[30]，学生時代いわゆる言語学や言語研究への関心が深かった訳でも，人一倍学業に抜きんでいたというわけでもないようだ。古典語も，当時のエリート層の身につけるべき教養の一環として，ラテン語を修めてはいたが，とりわけ秀でていたわけではなかったという[31]。

むしろ，*DNB* などの記述で特筆すべきこととして言及されているのはジェームズ・ピットマンの優秀なスポーツマンとしての側面である。イートンでは1918年と1920年に最高殊勲選手（victor ludorum）を獲得し，1919年にはパブリックスクールのミドル級ボクシングで優勝。オックスフォード時代には，1921年にケンブリッジ大学とのラグビー対抗戦に出場，翌年には同じくラグビーのカルカッタ杯戦でイングランド代表チームに入り，スコットランドと対戦している。同じく1922年には，陸上選手およびスキー選手としてとしてもオックスフォード大学代表チームに選ばれるなど，多彩な活躍を示している。

この頃出版された，各地に広がるピットマン家の家系を辿った書物の中にも，こうしたジェームズ・ピットマンの活躍は言及されている。著者チャールズ・ピットマンは，おそらくは当時一番有名な「ピットマン」であっただろう速記改良者アイザック・ピットマンについては「その系列はアイザックの曾祖父（ジョン・ピットマン，1736/7年に洗礼を受けた）までしか遡れず，はるかに古い歴史をもつ他のピットマン家とは格が違う」というようなことを申し訳程度に序章

で言及しているにすぎない。そこでジェームズや弟について「今イートン校の運動選手として活躍しているのは［アイザック］の孫で」と触れているのだ。もっとも主旨は「しかし，エジンバラのピットマン家のスポーツの伝統をひいている，と報道されているのは間違いで，彼らはエジンバラの系列とは関係ない」と，ピットマン家のなかでは旧家とはいえないアイザックからジェームズにいたる家系を，低く見るような記述に強引に結びつけるところにあったようではあるが[32]。なお，イギリス人の趣味としてとりたてて珍しいことではないが，ジェームズ・ピットマン自身も，家系を調べることについては関心をもち，オーストラリアに移住した祖先の軌跡をたどる書物に序文を寄せている[33]。

後年下院議員に出馬する際に，ジェームズ・ピットマンが自身をアピールするのに強調している点は，祖父の名と，実業家としての成功，そしてスポーツを通して培った「スポーツマン精神とチームワーク」であった。もちろんこれは伝統的にイギリスのエリート教育がスポーツを重要視することとも無関係ではないのだが[34]，青少年期において彼が第一義的にスポーツマンとして自己形成していったことは間違いないようである。

2.2 実業家としての成功

さて，ジェームズは大学卒業後は家業である出版，教育事業へ携わることになり，最初は職業訓練のための専門学校であるピットマン・カレッジの，ロンドンにあるメイダ・ヴェール校校長を務めた[35]。ピットマン社の事業内容はこうした専門学校経営も含んでいたのだ。もちろん，アイザック・ピットマン以来の速記関連出版事業も大きな位置を占めており，ジェームズ・ピットマンはピットマン式速記 New Era 版を使った『思考と理論』（*Thoughts and Theories*）や，『頻出単語リスト700』（*700 Common Words: a List of 700 Frequently Recurring Words and their Derivatives*）他，多くの速記関連の書物，パンフレットを出版した。また，実際にジェームズ・ピットマンはピットマン式速記に熟達しており，日常的に使用していた。手紙や書類は速記で下書きし，それを秘書がタイプで清書していたという[36]。そして，後年，バーナード・ショーの遺言により新しい英国アルファベット・コンクールが行われ，入賞作品が決まったときにも，自分は幸い速記を使っているのでこのアルファベットは必要ない，と漏らしたという[37]。

なお，仮説に過ぎないのであるが，ジェームズ・ピットマンが速記に習熟していたということは，のちの初期指導用アルファベット考案にも，間接的に影響があるように私には思われる。ピットマン・アーカイブに残された手紙や書類は，タイプで清書されたものがほとんどであるが，中にはジェームズ・ピットマンの手によると思われる，速記を使ったメモが書き加えられているものもがある。私は残念ながら解読できないのだが，その不可解な奇妙な文字群を眺めていると，他の多くのひとには理解できないこうした特別な記号に習熟していたピットマンにとっては，ローマン・アルファベットに少々手を入れたくらいの初期指導用アルファベットなどは，ごく普通の文字として受け入れられるべきものだったのではないか，という気がしてくる。自分にとっては速記の「便利さ」が自明であり，それに比べれば習得時の困難など微々たるものだという思

いがあった彼は，速記文字や初期指導用アルファベットのような変わった字面の文字が，通常のローマン・アルファベットしか解さない一般のひとに与える視覚的抵抗というものを過小評価していたのではないか，と思えるのだ。

ところで，ジェームズ・ピットマンは，ピットマン・カレッジで職業教育に携わるなど，仕事の上で教育に関わっていただけではなく，実業の外の社会活動においても，教育問題について大きな関心を示していた。その一例が，「ヨーク公のキャンプ（the Duke of York's Camp）」の会計係を1933年から39年まで務めたことである[38]。このキャンプは，後にジョージ六世となったヨーク公が1921年に始めたもので，パブリック・スクールの男子生徒と工業地域の少年達が，同数ずつヨーク公のゲストとしてキャンプに招待され，一週間を共に過ごし，それによって階級間の交流を図るというものである[39]。1936年12月にヨーク公が国王として即位した後は「国王のキャンプ（the King's Camp）」と呼ばれた。のちに初期指導用アルファベットを考案したときに，ピットマンがこのアルファベットの恩恵を受けることになるだろうと特に考えていたのは，恵まれない環境で育ち，読み書きも十分に習得できない子供達であった[40]。ヨーク公のキャンプの活動は，教育と階級の問題について，彼が既に1930年代から強い関心を持っていたことのひとつの現れと言えるだろう。

さて実業のほうに話を戻すと，1934年にはジェームズ・ピットマンはピットマン社の会長兼社長となっていた。前の代までは，ピットマン社の事業は創業者アイザック・ピットマンの長男であったアルフレッドが中心となっていたのだが，三代目はアイザックの次男アーネストの長男ジェームズの系列へまわってきたことになる[41]。この経緯においては，前述のように1927年にジェームズが結婚したマーガレット・ボーフォトの父，ジョージ・ローソン・ジョンストンの，成功した実業家としての支援が大きかったようだ[42]。ジェームズ・ピットマンは会社の最高責任者として，1937年のアイザック・ピットマン速記考案百周年行事に臨み，「アイザック・ピットマン卿　教育的理想主義の百年」(Sir Isaac Pitman : 100 years of educational idealism)を著した。また，同年の関連事業としてピットマンがラジオ放送を行ったスピーチ「ピットマン百周年を祝って」(Pitman Centenary Celebrations)はグラモフォン・レコードによって録音され，その原稿はピットマン式速記及び通常の表記の併記でパンフレット兼速記教材として発行された[43]。

ピットマン社自体は，1940年代半ばでも従業員千人という規模であり[44]，小さな会社ではないが，政財界に影響力の大きい巨大企業というわけでもない。しかしジェームズ自身は家系，教育，実業，結婚などによる豊かな人脈も幸いしてか，1945年に政界入りするまでの第二次世界大戦中の数年間に，中央政府の要職につく機会を得ている。1940年から1943年まで英国空軍義勇予備隊（RAFVR）に入り最終的には航空少佐（Squadron-Leader）を務めた後，1943年に大蔵省に移り，戦後の行政改革プランを作る役職(director of organization and methods)についた。また1941年には三十九歳で，イングランド銀行の最年少の理事となり，下院議員となるまで務めている。

2.3 下院議員として

1945年7月26日に実施された総選挙に，バースの下院議員候補として保守党から要請を受けて出馬したジェームズ・ピットマンは，政界入りを果たす。これは全国的には労働党が圧勝し，アトリー政権が生まれた選挙であり，ピットマン自身も労働党候補との間には2000余票の僅差しかなかった[45]。しかし以降は，対立候補との得票差も開き，1964年の選挙で立候補を見合わせるまでの二十年近く，1950年，51年，55年，59年と四回の再選を経つつ，この議席を守ることとなる[46]。大臣などの要職につくことはなかったものの，彼の国会での活動は「発言はまれであるが，少ない機会であったにしろ，議論に加わったときには情報量豊かな，聞くに値する発言を行った」という[47]。この「数少ない機会」のなかに，綴字問題関連法案などが含まれるわけであるが，それについては次章でとりあげることとしよう。その他の活動の中には，バース地域のガス会社がガス代を値上げしたことに対する反対運動，また，バース市の行政区域を拡大するための法案，ロンドン大学図書館資金援助運動，チャーチルへのバース名誉市民号贈呈などが含まれている[48]。

さて，後年のジェームズ卿の初期指導用アルファベットへの情熱的取り組みを知っている私たちにとっては，いったい，彼が実業家，政治家としてのキャリアにおけるどの時点でこの問題を考え始めたのかが，気になるところである。この点について，*DNB* には「ジェームズ・ピットマンは，かねてより祖父の綴字改革にかなり影響を受けており，下院議員になってからますます綴字改革に関わるようになった。またバーナード・ショーが新しいアルファベットを開発するために残した遺言に関する受託者となるようにも請われもした。このことはピットマンにさらに大きな影響を与え，彼は初期指導用アルファベットへ向かうこととなるのである。」と記されており，次章で詳述するように，下院議員としてのキャリアのなかで関心が高まったと考えるのが妥当であると思われる。政界入りする以前の三十代のうちからすでに綴字法簡略化協会の重要メンバーではあったのだが，四十四歳で政治家としての活動をスタートさせた時点では，少なくとも表向きには，あまりそうした問題は重要視していなかったらしい。それを窺わせるのは1945年の2月17日,総選挙を前に保守党候補予定者として言動が注目され始めていたころ,地元紙『バース・クロニクル』に掲載された「新しい教育法」に関する記事である[49]。

総選挙の前年1944年に，チャーチル内閣では教育法改革を行った。推進役R. A. バトラーの名からバトラー教育法とも呼ばれるこの法律により，義務教育年限の上限が十五歳に引き上げられ，グラマー・スクールなどの公的中等教育機関の無償化も決まった[50]。この新法について保守党下院候補予定者として意見を求められたジェームズ・ピットマンは，「教育とは何か」という質問について，四つの重要な点を挙げている。なかでも一番に挙げているのが「身体的教育」で，学校でのミルクの無償化，医療・歯科ケア，筋力訓練などの重要性を訴えている。引用されている彼の言葉はこうである。「私たちは，読み書き教育を重視するあまり，教育においては，ABCを教えるほかにも重要な要因があることを，無視してきたのではいか」。この発言はこれ以上敷衍されているわけでもなく，徒に大きな意味を読み込むことは避けなくてはならないが，今これ

を読む私は，後に彼が「ABC を教えること」にどれほど心血を注いだかに思いをいたさずにはおられない。

読み書き教育よりも身体教育を強調していたジェームズ・ピットマンが，「晩年大きな関心を持っていたのは，初期指導用アルファベットを子供達，とりわけ読みを学ぶことに困難をおぼえる子供達の教授用に確立することであった」と *DNB* に書かれるまでにいたったのは，どのような過程を経てのことだったのか，それは次章の主題である。

3　綴字問題への関心

3.1 綴字法簡略化協会（SSS）での活動

ジェームズ・ピットマンが綴字に関する関心を育て，諸活動に従事していくなかで，もっとも早い時期から関わっていた団体が綴字法簡略化協会（Simplified Spelling Society，以下 SSS と略）である。SSS は 1908 年，英語の綴字改革のためにロンドンで設立された団体で，ウォルター・スキート（Walter W. Skeat）が 1908 年から 11 年まで初代会長を務めた後，ギルバート・マレー（Gilbert　Murray）が 1911 年から 46 年までの長期を引き継いだ。その後の三代目会長がダニエル・ジョーンズ（Daniel　Jones）の 1946 年から 68 年までで，ジェームズ・ピットマンはその後を継ぎ 1968 年から 72 年まで，四代目会長を務めた[51]。彼が SSS に入会した正確な時期は不明であるが，三十歳代半ばであった 1936 年に SSS の運営委員会メンバーに選ばれていることは，1970 年までの SSS の歴史をまとめたモーリス・ハリソン（Maurice Harrison）の報告に記されている[52]。ハリソンのこの記事が発表された 1971 年はピットマンが SSS の会長を務めていた時期でもあり，記事全体がジェームズ・ピットマンと初期指導用アルファベットに好意的で，SSS に直接は関係ない彼の祖父アイザック・ピットマン卿の業績についても紙幅を割いている。

ジェームズ・ピットマンの綴字に関する活動，たとえば綴字改革法案（Spelling Reform Bill）や，簡易綴字法案（Simplifed Spelling Bill）提出や，初期指導用アルファベットなどは，常に SSS との完全な合意，協力体制のもとで展開されたわけではなかったが，SSS から全く離れて，独立して行われたものでもなかった。簡易綴字法案提出の際には法案作成の経費を SSS が拠出したというし[53]，初期指導用アルファベット考案においても，ジェームズが全く独創的に始めたわけでも祖父アイザックの綴字改革案フォノタイピー（Phonotypy）だけに基づいたわけでもなくて，SSS が推進していた新しい綴字法「ニュー・スペリング」(New Spelling)に負うところも大きかった。

最近まで長い間 SSS の公認綴字改革案として扱われてきたウォルター・リップマン(Walter Ripman)とウィリアム・アーチャー(William Archer)の「ニュー・スペリング」が，最初に一般読者の目に触れる形で出版されたのは 1940 年のことであるが，この出版に際してはジェームズ・ピットマンも貢献している。出版されたのは『ニュー・スペリング　第五版』であったが，これは初版から第四版までが『綴字改革への提言』（*Proposals for Spelling Reform*）のタイトルで出さ

れ，SSSメンバー間で私的に回覧されたにすぎなかったのとは，いくつかの点で性質を異にする。一点目は，第五版ではSSS運営委員会が小委員会を設け，1937年から40年までの間の数年をかけて大幅加筆修正を行ったこと，二点目は付属辞書『ニュー・スペリング辞典』(*A Dictionary of New Spelling*)も翌1941年出版されたことであり，三点目はジェームズ・ピットマンがピットマン社からの出版を請け負ったことでである。ピットマンはまた第五版のための小委員会の構成員五人のなかの一人として，アーサー・ロイドジェームズ(Arthur Lloyd James)，ダニエル・ジョーンズ，ハロルド・オートン（Harold Orton)，ウォルター・リップマンと共に名を並べてもいる。なお，最終的には1948年に出版された第六版が「ニュー・スペリング」の決定版となった[54]。このときは若干の改訂がなされ，こちらは改訂者としてダニエル・ジョーンズとハロルド・オートンの名のみが記されている。

綴字改革案としてのニュー・スペリングの大きな特徴は，『ニュー・スペリング』の副題「新文字の導入なしの綴字簡略化への提言」(Being Proposals for Simplifying the Spelling of English without the Introduction of New Letters）にもあるように，新しい文字を導入せず，現行のアルファベット26文字のみで改革を行う，というところにあった。ピットマンの初期指導用アルファベットが二重母音を表すのに新しい文字を導入したこととの大きな違いである[55]。ニュー・スペリングによる綴字法の一例を挙げておこう。"We instinktivly shrink from eny chaenj in whot iz familyar ; and whot kan be mor familyar dhan dhe form ov wurdz dhat we hav seen and riten mor tiemz dhan we kan posibly estimaet?"(『ニュー・スペリング』第六版　p. 92)。これは通常の綴字ならば"We instinctively shrink from any change in what is familiar ; and what can be more familiar than the form of words that we have seen and written more times than we can possibly estimate?"となるところである。

さて，SSSの組織運営への関わりでは，ジェームズ・ピットマンはダニエル・ジョーンズ会長のもとで会計係を務め，ジョーンズが1968年に他界した後，会長を引き継いだ。会計係時代のピットマンがSSSのために奔走したことのひとつが，バーナード・ショーが準備していた遺言を変更させようという試みであった。ショーは自分の死後，遺った財産を使ってローマン・アルファベットではない新しいアルファベットを作り，広めて欲しいという遺言状を用意していたのだが，これを翻意させ，財産をSSSへ遺贈してくれるように説得する努力であった（ショーの遺言については三章三節参照)。SSSの運営には，会員や賛同者からの寄付が重要だったからである。

協会設立時には，SSSに二年先だって1906年にアメリカで設立された綴字法簡略化委員会（Simplified Spelling Board）が多額の資金援助を鉄鋼王アンドリュー・カーネギー（Andrew Carnegie）から受けていたこともあったため，SSSは当初からカーネギーからの資金援助を計算にいれており，五人の副会長のひとりにカーネギーを選んで，毎年1000ポンドずつの援助を得ることに成功した[56]。1919年にカーネギーが亡くなると，この援助は途絶えたため，1931年までカーネギー財団からの援助が続いたアメリカの綴字法簡略化委員会[57]ほど大きな援助は受けられなかった。1937年には会員であった造船王ジョージ・ハンター卿がSSSに財産を遺している。

バーナード・ショーはSSSには属さず，独自で綴字や言語に関する発言を展開していたのだが，ピットマンらSSSメンバーとの交流もあったため，ピットマンは当時SSSの会長と運営委員会委員長も兼ねていたダニエル・ジョーンズと一緒にハートフォードシャーのエイオットにあるショーの家を訪ねたのだ。結局は失敗に終わったこの1947年8月5日の午後の出来事を，ピットマンは十年以上たってから，ショーの言語や綴り字に関する論考を集めた書物『言語について（*On Language*）』の巻頭に寄せるエッセイとして綴っている[58]。ダニエル・ジョーンズの伝記にも引用されているこの巻頭エッセイは[59]，ジェームズ・ピットマンの書いたもののなかでは，人間味に溢れ，読み手に心温まる読後感を与える数少ないなかのひとつであると，私は思う。彼の文章，特に初期指導用アルファベット関連の文章は，自分が正しいと考える論理を滔々と述べることで読者を納得させようという傾向がどうも強いように思えるのだが，このエッセイではバーナード・ショーの強烈な個性の前に，ジョーンズもピットマンも太刀打ちできなかった様子が淡々と描かれていて趣がある。

『言語について』の編者エイブラハム・トーバー（Abraham Tauber）との手紙のやりとりを見ると，1963年の出版時には初期指導用アルファベット普及に心身共に捧げていたピットマンが，この本への序文を書いて欲しいというトーバーの依頼に対しても，初期指導用アルファベットについて以前に書いた論説調のものを再度利用することですませようとしたこと，そして，トーバーが根気強く「軽いタッチの，挿話風，エッセイ風のものを」と，繰り返して頼んだ結果，ようやく執筆が実現したということがわかる[60]。なお，『言語について』には，このときピットマンが最初に渡した初期指導用アルファベットに関する文章も本文中に収録されただけでなく，彼がミュージカル「マイ・フェア・レディ」のロンドン公演用劇場プログラムに寄せた文章も再録されたため，全体としてピットマンの書いたものの占める割合がかなり大きくなっている。トーバーが「〔ショーの『言語について』ではなくて〕ショーとピットマンの『言語について』と呼んだ方がいいかもしれません」とピットマンへ宛てた手紙のなかで言っているのも[61]，あながち冗談とも受け取れないくらいである。

さて，SSS会長を1968年から1972年まで務めたジェームズ・ピットマンであるが，その後SSSとの関係は必ずしもよくない方向へ向ったようである。1985年にピットマンが亡くなったときには，SSSの機関誌に死亡記事は出ているものの（*JSSS* 1986年No. 2），先代会長の死亡記事にしては，あまりにも素っ気のない短いものと言わざるを得ない。そしてこれとは対照的に，ピットマンの後を継いでSSSの会長を務めたダウニングが，翌1986年に亡くなったときには，1987年の機関誌（*JSSS* 1987　No. 3）に，大きな写真入りの追悼文が捧げられ，彼のSSSへの功績が称えられた。ピットマンの死亡記事が載った号には，先に言及したモーリス・ハリソンが1971年に発表したSSS小史が再録されており，死亡記事にはそれを読めばピットマンのSSSへの貢献がわかると書いてある。しかし1985年の時点でのSSSメンバーからのピットマンの死を悼む言葉というものはまったくない。むしろ，『タイムズ』紙に載ったジェームズ・ピットマンの死亡記事が，初期指導用アルファベットをとりあげながらも，それがSSS考案のニュー・スペリ

ングにどれほど負っていたかを無視していると非難しているくらいである。ピットマンとSSSの関係がどの時点で変質したのか詳しいことはわからないが，ダウニング会長時代のSSS機関誌を読んでいると，おそらく，ピットマンとダウニングとの関係が，初期指導用アルファベット普及の過程で複雑なものになっていき，挙げ句の果てにアメリカで裁判沙汰にまでなったことが，その主な原因ではないかと推測される。ジェームズ卿の息のかかった「i.t.a. 財団」(i.t.a. Foundation) の活動がイギリスでは停滞し，やがて，彼とは距離をおいた「i.t.a. 連合」(i.t.a. Federation) が1978年に設立されたときには，後者の活動が*JSSS*に「i.t.aとの和解」として取り上げられている。

なお，SSSは現在も活動を続けており，協会としてナショナル・カリキュラムなどの国の教育政策に提言を行ったり[62]，メンバーが新しい綴字改革の可能性についての論考や過去の改革案についての考察を発表したりしている。2001年に初期指導用アルファベット回顧の報道がなされたときには，SSSのジョン・グレッドヒル会長がラジオに出たり，インタビューを受けたりしてるが，初期指導用アルファベットについての彼の評価はあまり高くなく，また，詳しくは知らない，と認めてもいるようである。もちろんこうした評価は今を生きる各自が下すものであり，現会長やSSSがピットマンとダウニングの間のわだかまりに未だ固執しているわけでもないだろうが，この四十年間のSSSにおける初期指導用アルファベット評価の推移においては，こうした事情も無視できないかもしれない。

3.2 綴字改革関連法案

ジェームズ・ピットマンの議員活動の中で，本稿のテーマとの関連において特筆すべきは，労働党のモント・フォリック下院議員（Mont Follick。ラフバラ選挙区選出。1888-1958）らと提出した綴字改革法案に関する議員立法案（private member's bill）であろう。英語の綴字改革に関する法案は，ピットマンの下院議員在任中に二度，1949年に綴字改革法案（Spelling Reform Bill），1953年に簡易綴字法案（Simplified Spelling Bill）が下院で審議されているが，いずれもモント・フォリックが議員立法案を提出する権利を得る籤によって獲得したものである。600名を超える議員がいる下院のなかで，議員立法案を提出できるのは毎年籤によって選ばれた20名だけなので[63]，モント・フォリックが10年余り（1945-1955）の議員活動のなかで二回この機会を得たのは極めて幸運なことであったともいえる。フォリックがやらなければ他の議員が提案した可能性もないとはいえないものの，やはり，イギリスにおける綴字改革運動の一場面が，下院でのフォリック議員の籤運という偶然性に負っているものを考えてみるのも興味深い。

1949年の「綴字改革法案」および1953年の「簡易綴字法案」という名称からは，内容の違いが想像しにくいが，この二つの法案はかなり異なった性質を持っている。前者は三部からなり，第一部では簡単で首尾一貫した綴字法を考案する委員会の設置を求め，第二部で新しい綴字法を強制的に実行するためのタイムスケジュールと組織を定め，第三部で規定等を定めるというものである[64]。

1949年3月11日に行われた法案審議では，まず最初にフォリックが法案提出の背景などについて述べ，他の議員とやりとりがあったのち，ピットマンが内容を説明している。ピットマンは保守党議員であるが，この法案に関しては労働党議員フォリックを積極的に支持し，何度も発言した[65]。フォリックも最初の発言で，ピットマンに言及して，「反対側の席（保守党の席）に座ってはいるが，私が下院議員となってからもっとも気持ちよく一緒に仕事をしてきた人」であり，「偉大な人物の孫であり，偉大な名前を持っている，バース選出の議員」[66]と言い，謝意を述べている。

そのジェームズ・ピットマンは発言のなかでバーナード・ショーから自分への手紙を引用し，そのなかでショーが祖父アイザック・ピットマンの速記を日常的に使い，大変高く評価していることに言及した[67]。「偉大な名前」を効果的に使っていると言えよう。しかし法案自体は87対84の僅差で否決された[68]。

1953年2月27日に審議された「簡易綴字法案」は，法案提出権を得たのはフォリックであったが，起草はジェームズ・ピットマンが行った。ピットマン自身の言葉を借りるならば「フォリック議員は，まるで議員立法提出権を籤によって獲得したのが自分ではなくて［ピットマン］であるかのように，法案を起草し，下院において発言する機会を与えてくれたのであった」[69]。このとき起草にかかった費用は，前述のようにSSSが負担したという。会員のなかには，立法化による綴字法改革は，政府の干渉，強制を意味すると言って反対する慎重派もいたとはいうものの，SSSとしてもかなり積極的にこの法案に取り組んでいたことは間違いないようだ。なにより，モント・フォリックはSSSの会員であり，これらの法案提出は新聞などでも報じられ，SSSにとっては恰好の宣伝効果を持つものであった。

最初の審議段階（第二読会）で否決された1949年の「綴字改革法案」とは異なり，1953年の「簡易綴字法案」は第二読会では賛成多数を得，委員会審議も通過した。理由はいろいろと考えられようが，そのひとつに，後者の内容が前者と比べて限定的であり，また革新性が少なかったということが考えられる。こちらの審議では最初からピットマンが発言し，法案内容を説明した。まずこの法案は「幼い子供達のために調査を実行するための法案である」[70]ことが最初に明言され，第一条では関係大臣が調査を実行する団体を選ぶこと，そしてその調査とは，「もし子供達に読みの学習のために与えられる教材が，簡易化された綴字で書かれていたらどうであろうか，ということを調べるだけだ」ということが述べられる。第二条以降では，調査完了以降の計画や，調査に関わる費用の補助などについて具体的な事柄を扱う。そして，法案内容説明において何度も強調されるのが，「いずれにしても子供達が最終的に学習するのは伝統的な正書法であり，簡易綴字ではない」，という点である。この内容を今ふり返って見ると，これはピットマンの初期指導用アルファベット実現へ向けての第一歩であったことがよくわかる。というのも初期指導用アルファベットも，幼い子供達のための教育手段として，一時的な補助的簡略化綴字として提案されたからである。この点において1953年の法案は1949年の法案が真の綴字改革を目指していたのとは，根本的に異なっているといえよう。

賛成65票，反対53票で初めの審議，つまり第二読会を通過したこの法案は，教育大臣の反対にも関わらず，委員長が賛成を示したこともあり，委員会審議も通過する。しかし，下院全体での次の審議に入る前に取り下げられた。取り下げにいたる経過についてはピットマンが後年，モント・フォリックの思い出として語った講演に詳しい[71]。委員会審議のあとの下院での報告審議，第三読会，そのあとの上院での審議という段階全てをこの法案が通過する可能性はない，と確信していたピットマンは，モント・フォリックが教育大臣に対して行う質問への，大臣の正式答弁という形で，法案の内容を一定程度認める発言を引き出し，言質を取ることのほうが，法案の成立に戦略的に賢明だと考えたのであった。モント・フォリックはそれまでの経過に気をよくし，非常に楽観的であったし，一方教育大臣はが頑として法案内容を認めようとしなかったが，自分が仲介の交渉に骨を折り，またフォリック支持の労働党党員も巻き込んで，フォリック説得に尽力し，法案取り下げを取り付けた，とフォリック追悼講演でピットマンは語っている。

1953年5月7日の議会での大臣への質問において，フォリックが「簡易綴字システムを使用することによって読みの教育を改良することが可能かどうか，しかるべき研究組織が調査計画を提言することに対する大臣のお考えは」，と尋ねたのに対して，教育大臣は「そのような改良の可能性を調査しようという研究組織の提言には，大臣の関心と好意を保証します」と答えた。そして，関心と好意を示すからと言って，補助金がでるわけではないこと，またそのような調査にともなう実験について地方教育当局や教員，親の協力をとりつけるのもその研究組織の責任である，ということを付け加えている。法案では関係部署からの補助金支給が組み込まれていたが，大臣はこの一点においてはあくまでも譲らず，精神的な支持を与えたのみであった。しかし実際，これがのちの初期指導用アルファベットの試行へとつながり，その試行過程でも大臣のお墨付きは有用だったわけだから，これだけの言葉を引きだしたことは，ピットマンにとっては大きな意味を持っていたに違いない。

一方，モント・フォリックは，教育大臣の答弁の五日後に『タイムズ』紙に発表した手紙では，この結果に満足である，法案が通ったとしても今回大臣から得た以上のものは引き出せなかったであろう，我々は影を追いかけず，実をとったのだ，というようなことを述べたにもかかわらず，その後，この取り下げについて，非常に後悔していたという。この1952年から1953年の国会会期中では，籤により法案提出権を獲得した二十の議員立法案のなかで七件が女王の裁可（Royal Assent）を受け，法律として発効している[72]。議員立法により提出された法案が最終的に法律として成立するかどうかは，もちろん，法案の内容次第であるが，ピットマンに起草を任せたとはいえ自分の名で提出した法案を半ばで取り下げてしまったフォリックは，あのときにピットマンらに説得されて取り下げてしまわなければ，法案は成立しただろうに，と思うようになり，説得にまわった友人，同僚を恨むようになったという[73]。

この後モント・フォリックは1955年には政界を引退し，初期指導用アルファベットの実験開始を目にすることなく，1958年に亡くなった。亡くなる半月前にフォリックは，ジェームズ・ピットマンを呼び，遺言について相談し，遺産を使って大学に教授ポストを作ってほしいという

希望を述べたというから[74]，法案取り下げの後悔が二人の間の絶交へつながったというわけではないようだ。マンチェスター大学言語学科にはにモント・フォリックの名を冠した教授ポストが設けられ，遺産の一部を使ってモント・フォリック・ライブラリーが整えられた[75]。ここには言語学一般の書物が含まれ，特に正書法に関する書物，文書類，SSS に関する出版物も所蔵されている[76]。またモント・フォリック・レクチャーも始められ，その第一回をジェームズ・ピットマンが担当したのが前述の追悼講演なのであった。

3.3 バーナード・ショーの遺言

モント・フォリックが遺言についてピットマンに相談した理由のひとつとして，親交の深さももちろんのことながら，ピットマンがバーナード・ショーの遺言に大きく関わっていたという事情が考えられよう。周知のように，ショーは英語の綴字や書記体系の諸問題に長い間大きな関心を持ち続けており，1950 年 11 月 2 日に亡くなった後，明らかにされた同年 6 月 2 日付けの遺言状では，遺産管理局（Public Trustee's Office）に，最低四十個の文字を持つ新しいアルファベットを決め，自分の戯曲『アンドロクレスと獅子（*Androcles and the Lion*）』（1912 年発表）を，その新しいアルファベットと伝統的な「ジョンソン博士のアルファベット」とで併記する形で印刷し，世界中の主要図書館に配布することを命じていた[77]。ショーは亡くなる六年前の 1944 年秋にはすでに季刊雑誌 *The Author* 誌上で新しいアルファベット普及のために遺産を使って欲しいという考えを公表していたし[78]，公表に少し先立つ 1944 年 7 月 19 日にジェームズ・ピットマンに宛てた手紙のなかでは，公認受託者（Public Trustee）から補助を受けてこの任務を遂行することをお任せしたい，というのもあなたがこの分野の最適任者だと考えるから，ということも述べている[79]。この後 1947 年に，ジェームズ・ピットマンが SSS の会計係として，会長ダニエル・ジョーンズとともにショーを訪れ，遺言内容を変更して，SSS に遺産を残してくれるよう説得しようとしたことは三章一節で述べたとおりである。

さて，実際に遺言執行の可能性が出てきたのは，1956 年，ショーの戯曲『ピグマリオン』を原作としたミュージカル「マイ・フェア・レディ」がブロードウェイで興行的大成功をおさめ，相続税支払いが可能になってからのことであった[80]。しかし，このとき同じく遺産受取人として名前の上がっていた大英博物館（British Museum）と英国王立演劇学校（Royal Academy of Dramatic Art）が，遺言第 35 条で指示された，新しいアルファベットを作るためのアルファベット・トラストの法的有効性に疑問を呈したため，遺言の公認受託者は法的解決を待たなくてはならなくなる。1956 年から 1957 年にかけて訴訟は続き，ジェームズ・ピットマンは公認受託者に助言をする専門家グループの一員としてこれに関わった。しかし 1957 年 2 月，ハーマン判事による第一審（High Court，高等法院）の判決は，遺言状はむしろショーの作品としての色彩が強く，これに基いては法的に有効な慈善団体（つまりアルファベット・トラスト）は作れない，というものであった[81]。

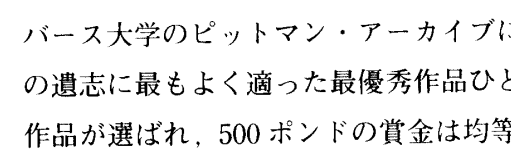
結局，第二審（Court of Appeal，控訴院）へ持ち込まれたこの件は，ピットマンの努力により，

当事者間での妥協的合意がとりつけられ，アルファベットに関する遺言第35条を執行するのに8300ポンドを使うことが可能となった[82]。そしてこの中から500ポンドを賞金として，新しい英国アルファベットを公募するコンクールが開催されることとなり，その詳細が1957年末に発表される。ここにこぎつけるまでにピットマンは，各界の有力者と連絡をとり，また新聞，雑誌なども積極的に活用して，このショーの遺言に関する世間の理解を深め，アルファベット・トラストへの理解を高める努力を続けたのであった。

1959年1月1日がコンクールの応募締め切りであったが，遅れて届いたものも受け付けられ，最終的には応募作品は400を超えた。やはり一番多いのはイギリス国内からであるが，国外からの応募も多かった（日本からの応募はなかった）。これらの応募作品には受付番号が付けられ，バース大学のピットマン・アーカイブに保存されている。しかし1959年12月31日には，ショーの遺志に最もよく適った最優秀作品ひとつを選ぶことができなかったということで，四つの優秀作品が選ばれ，500ポンドの賞金は均等に分けられることになった。

ところで今日，ショーの遺言による新しいアルファベット・コンクールの入賞者が関連文献などで語られる場合に，四人の名前が全て上がることはあまりなくて，ただ一人，キングズリー・リード（Kingsley Read）の名が上がることが多い[83]。というのも，リードの応募作品が，「シェイヴィアン」（Shavian）と名前をつけられ，最終的に『アンドロクレスと獅子』の転写に使われ，新聞報道でもコンクールの最終入賞者として取り上げられたからだ。

リードのアルファベットによる一節をあげると，次のようなものである（Shaw 1962, p. 20）。



通常表記で表すと“A jungle path. A lion's roar, a melancholy suffering roar, comes from the jungle.”となる。

四人の入賞者のなかからリードが選ばれた経緯は，残っている手紙のやりとりや，リード自身の回想から，ある程度窺い知ることができる。まず他の三人が，アルファベット・コンクール要項告示後に応募してきただけであるのに対して，リードは生前のショーに，新しいアルファベットについての自分の案を示し，好意的な反応を得ていた。リードが案を示したのはリチャード・アルバート・ウィルソン（Richard Albert Wilson）の『言語という名の奇跡』（*The Miraculous Birth of Language*, London, Dent, 1941，邦題は渡部昇一・土家典生訳，1981年大修館書店刊のもの）に寄せた序文で，ショーが一音一字（One Sound One Letter）の規則を持った新しいアルファベットのデザインを募集したのに応えたものであった[84]。1941年秋に出版されたこの本を読んだリードは一ヶ月ばかりの準備期間を経て，自らの作った47文字からなるアルファベットを使って，ショーの示した百語余りからなる課題文を転写し，ショーに送る。翌1942年1月にショーはそれを葉書に印刷して配り，1943年には例文つきのマニュアルを作るようにリードに依頼し，リードはそれに応えた。ショーはこのマニュアルに対して更に改良点を指摘し，その際にジェームズ・ピットマンに相談するようにと紹介した。ピットマンはリードに，このマニュアルをすぐに出版

するのではなく，まず改良を加えるように言ったという[85]。ショーが遺言の内容を *The Author* に発表する前年のことである。この後もピットマンはリードのアルファベットを気にかけており，ショーの死後，遺言執行に際して第一審で敗れた後，当初上訴が受け入れられなかった段階で，遺産なしでショーの遺志を実現する方法はないものかとリードに相談している。その結果パンフレットが出されもした[86]。法的争いが決着し，コンクールの参加作品募集が正式に始まった 1958 年，リードが応募作品として提出したのは，このときのパンフレットで示したアルファベットを修正したものであった。ピットマン・アーカイブ所蔵のリードの応募作品には 1958 年 9 月 16 日の受付印が残っている。また提出前の同年一月に，リードはショーの遺言公認受託者の依頼により BBC テレビの番組「パノラマ」に出演し，このコンクールの応募条件などについて語ってもいる[87]。リードはそもそもコンクールの初めから，他の応募者とは立っている場所が全く違っていたと言えよう。

四人の入賞が発表された 1959 年末から半年以上経った 1960 年 7 月 19 日，公認受託者はピットマンの推薦によりリードの案が最終的に選ばれたことを，リード，および他の三人に手紙で知らせる。またピットマンからも四人に宛てて手紙が送られた。他の三人はリードのデザインの枠内で，協力してほしい，必要とあれば自分の案のなかのデザインを使う許可をリードに与えて欲しい，という内容である[88]。しかし，この後，残りの三人がリードに実際に協力をするという機会はなかったようで，むしろ，お互いに連絡を取ることを禁じられていたようでさえあった[89]。

リード以外の三人のなかで，カナダ在住のポーリン・バレット夫人（Mrs Pauline Barrett）は，自身も音声学研究者であったが，リード案が選ばれたことを快く受けとめ，そのあともピットマンとの手紙のやりとりを続けた。ピットマン夫人や秘書とも親しくなり，ジェームズ・ピットマンが仕事等で北米を訪れた際，また，バレット夫人がイギリスを訪れる際には，連絡をし，都合がつけば会い，数年の後にはファースト・ネームで呼び合う友人にまでなっている[90]。彼女は，最終的に『アンドロクレスと獅子』のショー・アルファベット版が 1962 年 11 月に出版されたときにはカナダにおけるプロモーションに尽力しているし，初期指導用アルファベット普及のためのカナダにおける助力を申し出てもいる[91]。

しかしあとの二人の入賞者，オックスフォードシャー，バーフォードの病院に勤める医師 S. L. パグマイアー（Pugmire）氏と，ケントのマグラス（Magrath）氏は，四人の入賞発表後の経緯に不満と不信感をもっていたらしく，最終的にリード案だけが選ばれることになった選考過程の不備について，強い不満をもらした手紙を，ピットマンに送った。彼らは，最後まで，リード案が単独で採用されるのではなく，四人が協力してリード案をさらに改良するべきだと考えており，実際，入賞の時点ではそのような指示があったと理解していたのだ[92]。特に，最終決定の直前にほとんど時間の余裕がないときになって，再審査のためのアルファベット案の提出を求められたことに対しての不満が大きかったようだ[93]。こうした不満の手紙に対しては，ピットマンは公認受託者と連絡を密にとり，ときには受け取った手紙に対して送ろうとしている返事をまず彼に見せ，その内容でいいかどうかの判断を仰ぎながら慎重に対応している[94]。パグマイアーやマグラ

スの言い分を読んでいると，ピットマンのやり方には公正さを欠いた部分があったのではないかと思われてくるが，なぜ初めからリード案のみを選ばずに，まず四人の案を選んでから後にリード案に最終決定したのか，ジェームズ・ピットマンおよび彼の意を受けて決定を下す公認受託者の意図は明らかではない。

ただ，このように最終的な選考過程の内部事情にいささか不明瞭な点の残るバーナード・ショー遺言のアルファベット・コンクールではあったが，対外的には，ピットマンにとって自分の綴字問題への関心を，さらに広く世に知らしめるのに格好の機会となったといえるだろう。1962年11月に『アンドロクレスと獅子』の「ショー・アルファベット版」が出版されたとき[95]，目次の前の頁には「この本をジェームズ・ピットマン卿に捧げる：ショーの遺志を実現するため九年の長きにわたって惜しみない協力と絶え間ない支持をいただいたことへの感謝をこめて　C.R.S. 公認受託者　1962年」[96]との献辞があった。また公認受託者の前言に続いてピットマンは序文を書いてもいる。「惜しみない協力と絶え間ない支持」には，ピットマンが遺言執行にこぎ着けるまでの係争過程やコンクール実施の過程，そしてショー・アルファベット版の刊行に至るまでの過程において行った，各種メディアを使っての積極的宣伝広報活動ももちろん含まれる。

しかしこのような活動は，一方でピットマン個人にとっても，得るところの少ないものでは決してなかったはずだ。ノーベル文学賞受賞者でもある著名な劇作家バーナード・ショーの遺言執行において，中心的な役割を果たすということは，ピットマンの綴字問題に対する見識を宣伝する絶好の機会であったと思われる。とりわけショー自身がピットマンの祖父アイザックの考案したピットマン式速記を使って作品を書き，そのことの利点を公言していたのだから，ショーとの交友はピットマンにとって二重の栄誉を与えるものだったはずである。そして彼自身もそのことを充分自覚していたに違いない。先に本章第一節で1963年に出版されたショーの言語に関する論考を集めた『言語について』において，ピットマンの言語観を語る論考がショーの論考と併び，特異な存在感を持っていることを指摘した。この本の序文を書いたピットマンは編者トーバーと本の扉で名を並べているのだが，そこで彼に付けられた肩書きは「ジェームズ・ピットマン卿 K.B.E., M.P.　ショーおよびアルファベットと綴字改革に関する国際的権威」[97]というものだ。『言語について』の出版にあたっては，最終稿段階でピットマンの秘書が編者トーバーに送った手紙で，敬称や細部の記述について訂正を求めたものが残っている[98]。「国際的権威」の部分に直接言及したものではないが，敬称などについての他の細かい指示から判断すると，この記述もピットマンが認めた上でのものだったことは間違いない。ショーの遺言執行のためにピットマンが費やした「惜しみない協力と絶え間ない支持」は，ピットマンに十分な見返りを与えてくれたようである。

4　初期指導用アルファベット考案

バーナード・ショーの遺言執行と平行して，同時期にジェームズ・ピットマンの大きな関心を

占めていたのが，初期指導用アルファベット考案およびそれを使った実験の準備であった。1963年出版のショーの『言語について』に寄せたピットマンの文章が，ショーと直接は関係のない初期指導用アルファベットへの言及に傾きがちなのは，このときのピットマンの気持ちがすでに初期指導用アルファベット普及で占められていたからであろう。最終章では初期指導用アルファベット考案について述べる。

4.1 初期指導用アルファベット実験開始まで

1959年は，ジェームズ・ピットマンが初期指導用アルファベットに関する著述活動を本格的に始めた年である。まず5月29日付けの『タイムズ教育サプリメント』に，「読みを学ぶーある実験の提案」という記事が掲載された[99]。続いて，『拡大エアハルト（40音42文字）小文字ローマン・アルファベット』という，初期指導用アルファベットの概要を説明するパンフレットも発行されている[100]。

そして翌1960年6月13日には，ついに初期指導用アルファベットを使ったリーディング教授研究の実験の開始が，ロンドン大学で開かれた記者発表によって公表される。1953年簡易綴字法案審議の際に，教育大臣から支持をとりつけた，簡易綴字をつかってリーディング教育をすることの効果を調べる実験が，七年後，ついに具体化したのであった。ロンドン大学教育研究所（Institute of Education）が，全国教育研究財団（National Foundation for Educational Research in England and Wales）とならんで，この実験を実際に執り行うことになったのである。実際に，21校の小学校で実験が始まったのは，1961年9月の新学期のことであるが，実験開始が発表されてからの一年あまりは，具体的準備とならんで，関係方面への協力依頼，及び社会的認知を高めるために，広範囲での広報活動が展開されることになる。なお，現在，初期指導用アルファベットについての文献記述を見ると，実験開始の時期を1960年としているものと，1961年としているものが混在するが，これは「実験開始の記者発表」をもって開始とするか，実際に教育現場で始まったときをもって開始とするかの相違により生じものであろう。

ジェームズ・ピットマンは「初期指導用アルファベット考案者」という立場で実験の初動時の方針を決定する委員会に加わり，ロンドン大学教育研究所の所長等三名，全国教育研究財団の財団長等三名，ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジの心理学名誉教授および音声学科長と共に名を連ねており[101]，各方面の理解と支持を求めて精力的な活動を続けた。たとえば教育現場の教師には1960年2月26日付けの『ティーチャーズ・ワールド』誌にこのテーマの論考を発表して訴えかけ，同年秋11月23日には王立職業技能検定協会（Royal Society of Arts）の会合で「読みを学ぶ」と題した講演を行っている。王立職業技能検定協会は技術修得と産業の振興を目的として1754年に設立された英国の協会で，速記を含む各種商業検定，研修を行う。速記教育を初めとしたさまざまな商業教育関連事業を手がけていたピットマン社にとってはつながりの深い協会だった。この講演内容は翌1961年2月に同協会のジャーナルに発表された。これらの記事，論考のほかにも，1959年以降，ジェームズ・ピットマンは精力的に新聞，雑誌など多くの場で初

期指導用アルファベットについて述べているのだが，以下，初期指導用アルファベット実験開始前の比較的詳しい論考として，1959年の『拡大エアハルト（40音42文字）小文字ローマン・アルファベット』を取り上げ，その内容を紹介しよう。

4.2 『拡大エアハルト小文字ローマン・アルファベット』

1959年に出版された『拡大エアハルト（40音42文字）小文字ローマン・アルファベット』は23頁の小冊子で，副題に「その構想の根底にある理由と意図：例文付き」とあるように，新しいアルファベットの具体的な説明が主となっている。なお，「例文」（a specimen）として収録されているのは同年5月29日付けの『タイムズ教育サプリメント』に掲載された記事を，ピットマンの新しいアルファベットで転写したもので，パンフレットの四分の一を占める六頁にわたるこの文章は，単に例文としての機能を果たすだけでなく，当然その内容を伝える機能も備えていた。

さて，このパンフレットのタイトルにある「エアハルト」というのは，ピットマンが鋳造植字機の大手メーカーであるモノタイプ社[102]に，自分のアルファベット用に新しい文字の製作を頼んだときに，もとになった活字書体の名前である。通常のエアハルトの書体に追加文字を加えたという意味で，「拡大エアハルト」となったのだ。ピットマンのアルファベットは最終的には「初期指導用アルファベット（initial teaching alphabet, i.t.a.）」という名称で定着したが，最初のパンフレットはこのようなタイトルで紹介され，またアルファベット自体は当初は一般には「拡大ローマ字」（Augmented Roman）という名称，略称ARでも呼ばれていた。本稿では混乱を避けるために，時期に関わらず「初期指導用アルファベット」という名称を使っているが，厳密にいうとこの名称で呼ばれていなかったときもあった。

パンフレット本文は(1)拡大アルファベットとは何か，なぜ必要なのか，(2)どのようにこのアルファベットを使うか，(3)拡大アルファベットの文字一覧表，(4)音一覧表，(5)例文，(6)文字・音素一覧表への注，の構成をとる。以下，要点を紹介しよう。

(1)で強調されるのは，この拡大アルファベット（つまり初期指導用アルファベット）が，綴字改革ではなくて，読みの教育のための手段だということである。この点について，ジェームズ・ピットマンは非常に重要視していたようで，いろいろな場面でこれを強調しているのが見られる。綴字改革に対する好意的とは言えない反応，これまでの幾多の改革案の失敗の歴史，なかでも速記改革者としては大きな成功を収めた祖父が，綴字改革案「フォノタイピー」では支持を得ることができなかったことなどを見てきたからであろうか。

現行のアルファベットを「拡大」する理由は，現在のアルファベットは完全に一音一字の原則で英語の音を表すのには数が足りず，「一貫して表音的なアルファベット」の方が今の英語の読み方を教えるのに有用だからだ，とピットマンはいう。ここで英語の読みを教える対象として，一義的にあげられているのは英語を母語とする子供達で，つぎに二義的に（ローマン・アルファベットを使う）他の言語を母語とする外国人英語学習者があがっている。英国内での実験との関

連や，アメリカやオーストラリアなど英語圏での活動が語られることが多い初期指導用アルファベットであるが，構想の極初期の段階から，外国人英語学習者のことも視野に入れていたことがわかる。ピットマンは初期指導用アルファベットを英語の音声教育の手段として有効だと考え，国際音標文字（international phonetic alphabet, IPA）を仮想ライバル視し，両者を比較してもいたのだ。この点は現在の私達の感覚からすると理解しにくいところだが，外国語学習において手軽に使用できる音声教材がまだ一般には普及していなかった1960年前後の時代状況を考慮にいれなければならないだろう。

また，初期指導用アルファベットの二大特徴として，大文字を用いず小文字だけを使うことにより，文字に一貫性を持たせること，および，二字で一音を表す“ee”，“sh”などの二重字に対して新しく文字を作り，一音一字システムを作ることを挙げている。実際ピットマンのアルファベットを検討すると，この一音一字原則は完全には守られていないところも散見するのだが[103]，原則としては重要視されていた。

(2)の「どのようにこのアルファベットを使うか」で特筆すべき点は，先に三章一節で触れたSSSの「ニュー・スペリング」への言及が多いことであろう。初期指導用アルファベットを使って英語の単語を綴っていくとき，どのように表音表記すればいいか，ピットマンは八つの原則を挙げて説明しているのだが，そのうち，半数の四原則で，「ニュー・スペリング」への準拠や参照，もしくは準拠，参照した上での一部修正が述べられている。

初期指導用アルファベットの考案のもととなったものを考えるときに，どれだけをSSSのニュー・スペリングに負っているとみなし，どれだけを祖父アイザック・ピットマンの綴字改革案「フォノタイピー」からの影響と見るかは，人により見解の分かれるところである。たとえば『タイムズ』紙の死亡記事で，祖父アイザックのみに言及があったことをSSSが非難したことは，前述の通りである。しかし，この初期のパンフレットを見る限り，その構想は「ニュー・スペリング」に負うところなしには難しかったか，もしくは，かなり異なるものにならざるを得なかったと判断すべきだと思われる。そして，この段階ではジェームズ・ピットマン自身もそれを認めるにやぶさかではなかったのだ。むしろ，この小冊子の段階では祖父アイザック・ピットマンのフォノタイピーには触れられていないことを明記しておかなくてはならない。

これはジェームズ・ピットマンがその後，初期指導用アルファベットの源泉を説明するときにも，SSSのニュー・スペリングからの影響には言及せずに，祖父アイザックの改良綴字「フォノタイピー」とのつながりのみを強調することがあったことと対照的である。たとえば，1960年代初めに出されたと思われる，本文三頁のみの短い伝記的パンフレットでは，初期指導用アルファベットの説明の半分以上は，祖父アイザックの綴字改革案およびその教育への応用の説明に使われており，アイザックの肖像スケッチまで載っている[104]。ジェームズ・ピットマンには，ニュー・スペリング自体がアイザック・ピットマンを初めとする他の先人の綴字改革案を基にしているという認識もあり[105]，それがこうした説明につながったのかもしれない。しかし伝記的パンフレットとはいえ，家系的つながりを強調しすぎた事例のようにも思われる。ジェームズ・ピットマン

III. The Alphabet by rote
42 characters§

1.	æ	ae	25.	ʧ	ith
2.	b	bee	26.	ð	thee
3.	ʧ	chee (see)	27.	ʃ	ish
4.	d	dee	28.	ʒ	zhee
5.	ee	ee	29.	ŋ	ing
6.	f	ef	30.	ɑɑ	ahv
7.	g	gae	31.	a	at
8.	h	hae	32.	e	et
9.	ie	ie	33.	i	it
10.	j	jae	34.	o	ot
11.	k	kae	35.	u	ut
12.	l	el	36.	au	aul
13.	m	em	37.	ʊ	foot
14.	n	en	38.	ʊʊ	brood
15.	œ	oe	39.	ʊu	owl
16.	p	pee (kue)	40.	ʊi	oil
17.	r	rae			
18.	s	ess	41.	z	zess
19.	t	tee	42.	wh	whae
20.	ue	ue			
21.	v	vee			
22.	w	wae (eks)			
23.	y	yae			
24.	z	zed or zee			

表1：拡大アルファベット（初期指導用アルファベット）文字一覧（Pitman（1959）p.12）

が必要に応じて祖父の名前，業績を有効に使っていたことは，選挙時，綴字改革関連法案審議時，またバーナード・ショーの遺言執行時などにも見られたことであるが，初期指導用アルファベット普及においても，かなり意識的に「ピットマン」という名前の重みを利用していたようである。

さて，『拡大エアハルト小文字ローマン・アルファベット』の内容紹介に戻ると，(3)では表1に示した文字一覧が示された。各項の左側が使用される文字で，右側がその文字の名称である。この時点では合計42文字であるが，のちに43文字になり，最終的には44文字になるといった変更を孕んだ部分であることを指摘しておく必要がある。ジェームズ・ピットマン自身，こうした新しいアルファベット案や綴字改革案が，少しずつ修正を繰り返し決して固定されないことがもたらす問題点は，十分に承知していた。例えばこの十年後1969年に，共著者ジョン・セントジョン（John St. John）の助力を得て，初期指導用アルファベットについて背景，理論，実験内容などをまとめた『アルファベットと読み』（*Alphabets and Reading*）のなかでジェームズ・ピットマンは祖父アイザックのフォノタイピーの例に触れ，案が不断に変わり続けたことがもたらした不利益を説いている。そして，初期指導用アルファベットは同じ轍を踏むことを避けるためにも，当座は変更や修正を認めない方向で行きたいと述べる。当座は変更すべきでないが二十年後くらいになれば見直しを考えてもいいのではないか[106]，という件を読む時，現実には，その二十

IV. The Alphabet by Sound
40 sounds characterized
(phonemes)§

Consonants			Vowels and Diphthongs		
1.	puh	p	25.	ak	a
2.	buh	b	26.	ahd	ɑ (*or* ar)
3.	tuh	t	27.	ek	e
4.	duh	d	28.	aed	æ
5.	kuh	k	29.	ik	i (*or* y)
6.	guh	g	30.	eed	ee
7.	fuh	f	31.	ok	o
8.	vuh	v	32.	au	ɑu (*or* or)
9.	thuh	ʧh	33.	uk	u
10.	dhuh	ɟh	34.	oed	œ
11.	suh	s (*or* ʃ)	35.	ook	ω
12.	zuh	z	36.	oo	ɷ
13.	shuh	ʃh		*uh	er, ir, ur, yr
14.	zhuh	ʒ	37.	ied	ie
15.	chuh	ʧh	38.	ou	ɔu
16.	juh	ɟ	39.	oi	ɔi
17.	muh	m	40.	ued	ue
18.	nuh	n			
19.	ung	ŋ			
20.	luh	l			
21.	ruh	r			
22.	wuh	w			
23.	yuh	y			
24.	huh	h			

表 2：拡大アルファベット（初期指導用アルファベット）音一覧（Pitman（1959）p.13）

年後にあたる 1990 年頃には初期指導用アルファベットが完全に姿を消していたことを知っている私達はいささか皮肉な気持ちにならずにはいられない。もっとも 1985 年まで生きたピットマン自身もこの結末をかなりの部分目にしてはいただろうが。

(4)の音一覧では表 2 に示したように英語の子音と母音を計 40 書き出し，その音に対応する初期指導用アルファベット文字を併記している。しかし音の名称は独自のものであり，その表記もニュー・スペリングのような独特の綴りで表されているため，難解な表となっている。音名か初期指導用アルファベット文字かの少なくともどちらかには通じていないと，一覧表が利用できないからだ。たとえば，「子音」として音“puh”に文字“p”，音“buh”に文字“b”が対応するなどというのは比較的わかりやすい例であるが，音“dhuh”に文字“ɟh”が対応，などというのはニュー・スペリングでは有声歯摩擦音を“dh”の二重字で綴り，無声歯摩擦音と区別する，ということを知っているか，もしくは初期指導用アルファベットでは前者を“ɟh”という新しい文字，後者を“ʧh”という新しい文字で表して英語の二重字“th”の有声音，無声音を区別するということを知らなければ意味をなさない。私には初期指導用アルファベット構想のなかで，技術的な弱さを見せ最も説得力にかけるところではないかと思われる。

(5)は『タイムズ教育サプリメント』記事を初期指導用アルファベットで転写し再録したものである。一節を引用してみよう。

> if yœ hav red aɜ far aɜ ɾhis, ɾhe nue meedium will hav prœvd tœ yœ several points, ɾhe mœst important ov whiɟh iɜ ɾhat yœ, at eny ræt, hav eeɜily mæd ɾhe ɟhænj from ɾhe ordinary rœman alfabet wiɾh konvenʃhonal spelliŋɜ tœ aɯgmented rœman wiɾh systematik spelliŋ.

これは通常の綴字で表すと "If you have read as far as this, the new medium will have proved to you several points, the most important of which is that you, at any rate, have easily made the change from the ordinary Roman alphabet with conventional spellings to Angmented Roman with systematic spelling."となる。

この記事は，新聞掲載時には最初の二段落だけが初期指導用アルファベットで印刷され，残りは通常のアルファベットを使った通常の綴字で印刷されたのだが，このパンフレットでは全文が転写された。記事前半では初期指導用アルファベットが綴字改革の試みではなく，初学者に読みを教えるための一時的な手段に過ぎないことが明言されたあと，初期指導用アルファベットの42文字が説明されるが，ここまでは(1)から(4)と重複する内容である。そして記事後半で，モント・フォリックが1953年5月に教育大臣から法案引き下げと交換に下院で言質をとった，簡易綴字を使った読み方教育の実験についてのやりとりが，国会議事録から再録され，続いて，1953年7月に開かれた教育委員会連合の年次大会でも，読み方教育について，簡易綴字が有用かどうかも含めて調査する必要があると決まったことが紹介される。最後に，もし読者のなかにこうした実験に価値を認める教員（公立校，私立校を問わず）がいて声をあげてくれるならば，研究機関に実験開始を説得することができるだろうという呼びかけがなされる。自分に連絡をくれれば，この『タイムズ教育サプリメント』の記事の別刷りを六部送るので，その際に，積極的に実験に参加してもいいと考えているか付記して欲しい，そうすれば自分たちにとっても教員，保護者，教育当局からの支持の度合いをはかる目安になるから，とも書いている。

初期指導用アルファベットで書かれたこの(5)の六頁を読みながら私が受けた印象は，英語の通常の綴字に慣れた読者ならば読めないことはないとはいえ，たとえ英語母語話者であっても慣れない分，読むスピードは普通よりも遅くなるだろうし，またこのアルファベットに関心がある読者であっても慣れるまでの間は視覚的，心理的な抵抗を幾分感じずにはいられないだろうというものだった。それは通常の日本語表記に慣れた読者が，仮名だけで書かれた文章を読むときに感じる抵抗に通じるところがあるだろう。読者はこの部分も億劫がらずに読むだろうと，ピットマンは予測し，重要だと思われることも，ためらわずに新しいアルファベットで記述したのであろうか。

なお，1959年のこのパンフレットでは，初期指導用アルファベット使用による読み書き教育の向上がもつ社会的意義についてはあまり触れられていないが，この点は1961年発行の「読みを学ぶ」で詳しく述べられている。1960年11月23日に王立職業技能検定協会の会合で発表され，翌61年2月に協会のジャーナルに発表された「読みを学ぶ」は，1960年6月に実験開始が記者発表されたあとの論考なので，参加団体，委員会構成メンバーなどが最初に紹介されたあと，

この実験を遂行する動機が述べられている。英国の子供達の読みの能力の水準が低いことを統計資料を用いて説明し，この由々しき問題を解決するためにも読みの教育を向上させるための実験が必要だと説くのである。実は，ここで使われている統計の使い方には，疑問点があることはすでに指摘されているのだが[107]，ここでは，ピットマンがこうした社会的問題意識を強調して実験を正当なものと説得しようとしたことを指摘するにとどめたい。

4.3 初期指導用アルファベット採用決定の経緯

ところで，このように実験の広報活動の一環として，多くの読者にむけてピットマンが初期指導用アルファベットについての著述を始めたのは，1959年だったのだが，実際，彼がこのアルファベットを構想したのは，それよりかなり前のことであったようだ。ピットマンは後の著作のなかで，1953年4月6日には著名なカリグラファーのアルフレッド・フェアバンク（Alfred Fairbank）に初期指導用アルファベットで必要な新しい文字をデザインしてもらったと述べている[108]。フェアバンクは当時設立されたばかりのイタリック・ハンドライティング協会会長でもあり[109]，こうした人選にはピットマンの志向が現れているようにも思える。ところで1953年春というと，まさに簡易綴字法案審議とほぼ同じ時期ということになる。専門家にデザインを依頼するに際して，原案はさらに前にできあがっていたであろうから，法案審議の段階で既にピットマンが独自のアルファベットを構想していたことは間違いない。

では，なぜピットマンは1959年まで大規模な展開を待っていたのだろうか。残念ながら，これについては，ピットマン自身が何かを述べているわけではなく，間接的に状況から判断するしかない。実験開始の準備が徐々に整ってきたのがこの時期だったということだろうか。ひとつの仮説としてすでに示唆されているのは，1958年にモント・フォリックが亡くなったことにより，ピットマンの初期指導用アルファベットが，実験に使われる唯一の有力候補となったということである[110]。つまり，改めて確認しておくと，1953年5月にフォリックとピットマンが簡易綴字法案審議後に，「簡易綴字を使った読みの教育の実験」について教育大臣の精神的支持を引き出したときに意図されていたのは，誰かの特定の簡易綴字案ではなく，たんに「なんらかの簡易綴字システム（a system of simplified spelling）」を使っての実験であった。モント・フォリック自身も綴字改革に関しては案を発表しており[111]，彼は1949年の法案提出のときから，自分の案を押しつけるわけではないと繰り返してはいるものの[112]，何も言わずに簡単にピットマンに譲るつもりはなかったかもしれない。この点に関しては，1958年のモント・フォリックの死，1959年からのピットマンの本格的な広報展開，という事実の流れに基づいた単なる仮説にすぎないので，これ以上つきつめることはできないが，実験においてピットマンの初期指導用アルファベットが使われるに至るまでの経過については，もう少し詳しく述べておこう。

教育大臣の支持をとりつけた実験を実際に遂行するにあたって，どの簡易綴字案を使うかがどのように議論され，どういう過程を経て最終的にジェームズ・ピットマンの初期指導用アルファベットに決まったかを明らかにしようと試みたのは，実験を実際に担当したロンドン大学教育研

究所教育心理学科付属のリーディング研究ユニット（Reading Research Unit）主任であったジョン・ダウニングであった。第三章第一節で言及した，ピットマンの後を継いでSSSの会長を務めた人物である。彼は初期指導用アルファベットを総合的に評価した著書の中でこの点の解明を試みているが[113]，結論として，決定的な要因はつきとめられないでいる。以下ダウニングの論に沿ってこの経過を見てみよう。

ダウニングは，ピットマンの初期指導用アルファベットに対抗し得た案として簡易綴字法案を議員立法案として提出したモント・フォリック自身の綴字改革案，および，アクセル・ヴァイク（Axel Wijk）の「規則化英語」（Regularized English）[114]をあげている。まずフォリック案を検討するのにダウニングは，ピットマンが1964年2月7日に行ったフォリック追悼講演での議論を紹介している。ピットマンはこのなかで自分の案がフォリックの綴字改革案より優れていると考える点を列挙したのだが，ダウニングはそれに自身の見解を加えた[115]。ピットマンが初期指導用アルファベットの優位点として挙げた点は，ダウニングによると，あまり重要ではないか，もしくは見解の相違に過ぎないとされており，ダウニング自身はピットマンの議論に賛成していないことが明らかにされる。「[フォリック案とピットマン案，および他の案も含めて] どの案が優れているかについて，なんらかの予備実験を行えばよかったのだろうが，実際には行われなかったので……なぜピットマン案が選ばれたのかわからないままなのである」[116]と，理論的な点での優劣の違いが明らかであったわけではないと言い切った後ダウニングは，むしろそうした内容面以外に理由を見つけだそうとする。フォリックが1958年12月に亡くなったこと，翌1959年ピットマンは自分のアルファベットを小学校での実験に使う簡易綴字として使うように提案した多くの記事を発表したことを併記したあとで，「1959年以降，どの簡易綴字を実験に使うかという点についてはこれ上の議論はなかったようである」と結ぶダウニングの記述[117]からは，有力なライバルの死によって，ピットマン案が最有力候補として残ったという結論が示唆される。

さて，フォリックとピットマンの間には長年の交友関係があり，フォリックは遺言に関してピットマンに相談していたくらいだから，実験で使用する簡易綴字の選択に関しても，両者の間に敵対的競争関係が存在したわけではなかった。一方，アクセル・ヴァイクの場合はそうではない。ヴァイクはピットマン案に対して反対を公に表明し，代替案を提案した唯一の存在であった。ヴァイクは自らの簡易綴字『規則化英語』（*Regularized English*）を1958年に出版し，1960年にピットマンの初期指導用アルファベットの問題点を列挙して批判し，自分の「規則化英語」の方が実験に使用するのにふさわしいとパンフレットを作って訴えたのであった[118]。

しかし実際のところ，1960年6月にはピットマンの初期指導用アルファベットを使った実験開始計画が発表されているのだから，ヴァイクはすでに抗議の時機を逸していた。またダウニングは，ヴァイクのピットマン批判のトーンがかなり感情的，論争的であったこともヴァイクにとって不利に働いたと言っている。ただ，ヴァイクの抗議を検討するなかでダウニングが指摘した次の二点は，当時，ピットマンおよび彼の初期指導用アルファベットがどのように受け止められていたかを示すものとして，記しておく必要があろう。

第一点は，「ピットマンのアルファベットは素人の思索の産物に過ぎない（only the product of a layman's speculations）」[119]というヴァイクの言葉を取り上げて，ダウニングが「これは当時の一部の学者の感じ方を言い表したものだったかもしれない」[120]と述べているところである。ダウニングはすぐに，これは感情的な批判であり初期指導用アルファベットの客観的評価とは無関係だと述べているが，ピットマンが学界でどう受けとめられていたかを示す言説として興味深い。

第二の点は，ヴァイクがピットマン案批判パンフレットのなかで紹介している，ロンドン大学教育研究所所長 M. L. エルヴィンがヴァイクに宛てた手紙の一部である。ヴァイクの引用によると「[エルヴィンたち実験に携わるスタッフの一義的な関心は] 非常に表音的でない [今の英語の] アルファベットが，読みにおける困難の大きな原因となっているかどうかを，明らかにより表音的なアルファベットを使って読みを学習したときと比較することで，確認することであって，この目的のためには [実験で使われる，より表音的なアルファベットの] 完璧性の度合いを議論する必要はない」[121]とエルヴィンは考えていたようだ。初期指導用アルファベットに対するこうした一種突き放した見方はピットマンの著作には現れないが，当時実験に携わった人たちのなかにはこういう見解もあったのだった。なお，ヴァイクはピットマンとも直接話をしていたらしく，ピットマンはヴァイクに対して，まず自分のアルファベットを試してみて，うまくいかなければ次にヴァイクの案を試せばいい，と言ったようだ[122]。

最終的にピットマン案が実験に採用された理由について，ダウニングが検証した以外の要因を私自身はまだ見つけられないでいる。フォリック案，ヴァイク案と並んで，対抗候補として可能性があったのではないかと考えられるのは SSS のニュー・スペリングであるが，これについてダウニングは特に言及してはいない。ただ，1954 年 4 月に開かれた SSS の運営委員会で，SSS としては，どの簡易綴字案を使って実験を行うかについては，ロンドン大学教育研究所には何も指示しないし，指示できない，という合意に達したというから[123]，SSS の案であるニュー・スペリングを推すこともできなかった，とも考えられる。

結びにかえて

1961 年 9 月，初期指導用アルファベットを使った実験がイギリスの 21 の小学校で開始された。ジェームズ・ピットマンにとっては，自分の考案した初期指導用アルファベットが，実験とはいえ，公教育の場で実際に使われるという記念すべき年であった。そしてこの年は，ジェームズ・ピットマンにとって，ナイト爵位（K. B. E.）を授与され「ジェームズ卿」と呼ばれるようになった栄誉の年でもあった。この年，ジェームズ・ピットマンはちょうど六十歳を迎えている[124]。

しかし，もちろん，ジェームズ卿にとって，初期指導用アルファベットを使った実験の開始は，あくまでもひとつの通過点に過ぎず，実験を成功させ，さらに広範囲の学校でこのアルファベットが採用されるようにと，彼はそれまで以上に精力的な活動を展開したのであった。「代々の教育大臣や，視学官，教育関係有力者にロビー活動を行い，教師の会合に顔を出し，支持を求めた」

と『タイムズ』紙死亡記事はこの頃の彼の活動を記している。

第一章で述べたように初期指導用アルファベット考案のこの時点までが，本稿で描こうとしたジェームズ・ピットマンの伝記的スケッチの範囲であり，晩年のジェームズ卿についておよび，初期指導用アルファベットの展開については稿を改めて論じることとしたい。その際には，ジェームズ・ピットマンの論考，i. t. a. 財団の刊行物，研究者の立場から初期指導用アルファベットについて多くの論文，研究書を刊行したジョン・ダウニングの仕事，のみならず，教育政策関係の資料，ピットマン・アーカイブ所蔵で現在整理中である文書，信書類を参照する必要があろう。

最後にここでは，この後の初期指導用アルファベットについて，概略を記しておきたい。初期指導用アルファベットを使った実験は，当初，ある程度の成功を収めた。ロンドン大学教育研究所リーディング研究ユニットでこの実験を担当したダウニングは，初期指導用アルファベットを使った児童のクラスの方が，通常の綴字で書かれた教科書を使ったクラスよりも，読みの習得が優れているという報告を発表し，初期の実験終了後もこのアルファベットを導入する小学校は増えていった。また，アメリカやオーストラリアなどでも初期指導用アルファベットの使用が試みられた。しかし，1970年代になると初期指導用アルファベットの影響力は衰えていき，1980年代になるまでにはほとんどの学校で使われなくなったという。この衰退の理由については，他の教育メソッドが力を持つようになったこと，初期指導用アルファベット推進団体であるi. t. a. 財団の中の組織的問題，そこから生じた訴訟問題，また，初期指導用アルファベット使用には特別な教材がいるが，それが教育現場では負担となり継続が難しかったこと，導入当時に初期指導用アルファベットに賛同した教師達が職場を離れる時期が来たこと，そして何よりも本質的なこととして，教育関係者がこのアルファベットの教育効果を認めるには至らなかったこと，などさまざまな要因が考えられる。

本稿で提示した初期指導用アルファベット考案までのジェームズ・ピットマン卿の伝記的スケッチが，二十世紀半ばのイギリスにおける綴字改革運動の一側面を描くことに，いささかなりとも貢献するところがあれば幸いである。

Acknowledgements

I would like to express my gratitude to Lizzie Richmond, the archivist at the Pitman Archive Collection at the Library of the University of Bath, who helped me very generously during my research at the library and answered various questions. I am also very grateful to Katy Jordan, the librarian at the Engineering Department of the library, who kindly helped me with Pitman Books. The accidental meeting with Mr and Mrs Peter Pitman, the eldest son of late Sir James Pitman was a most unexpected happy surprise during my stay in Bath. They were at the library to deposit more of Sir James's i.t.a. materials to the University. It was very kind of them to answer various questions asked by this extremely excited researcher and to show interest in her project, which was very encouraging. The trip to Bath in summer 2002, however, would

have been impossible without the generous help of Mr Richard and Mrs Jean Dibben and I owe especially to Jean Dibben for her kind introduction of me to former i.t.a. teachers in her village. The ex-i.t.a. teachers, Mrs Pat Camp and Mrs Elsie Oakenson, now retired for many years, kindly spared some time for me and answered my various questions patiently. The i.t.a. materials and Simplified Spelling Society documents Mrs Oakenson generously gave to me were invaluable for my research.

参考文献

Abercrombie, David (1965). "Isaac Pitman" *Studies in Phonetics & Linguistics*. Oxford : Oxford University Press. pp. 92-107.

Bailey, Richard W. (1991) *Images of English : A Cultural History of the Language*. Cambridge : Cambridge University Press.

Baker, Alfred (1980 [1908]) *The Life of Sir Isaac Pitman.* London : Sir Isaac Pitman & Sons, Ltd.

Bell, Masha (2001) "The Significance of the i.t.a. Experiment" *Journal of the Simplified Spelling Society.* No. 29. pp.26-28.

Bourcier, Georges (1978) *L'orthographe de l'anglais : Histoire et situation actuelle.* Paris : Presses Universitaires de France. 米倉綽・内田茂・高岡優希（訳）『英語の正書法：その歴史と現状』東京：荒竹出版，1999.

Bradley, Henry (1968 [1904]) *The Making of English.* London : Macmillan. Revised edition by Simeon Potter. 寺澤芳雄（訳）『英語発達小史』東京：岩波書店，1982.

Brown, Bob (1995) "Reviewing spelling schemes. . .and what did they do?" *SSSNewsleter*, Aug 1995 pp. 9-11.

Carney, Edward (1994) *A Survery of English Spelling*. London& New York : Routledge.

Clark-Kennedy, Archibald (1985) "Obituary Sir James Pitman : Proponent of Initial Teaching Alphabet" *The Times*. 3 September 1985.

Collins, Beverley and Inger M. Mees (1999) *The Real Professor Higgins : The Life and Career of Daniel Jones*. Berlin & New York : Mouton de Gruyter.

Downing, John A. (1964a) *The Initial Teaching Alphabet.* London : Cassell & Company Ltd.

————(1964b) *The i.t.a. Reading Experiment : Three Lecutres on the Research in Infant Schools with Sir James Pitman's Initial Teaching Alphabet.* London : Evans Brothers Limited.

————(1967) *Evaluating the Initial Teaching Alphabet : A Study of the Influence of English Orthography on Learning to Read and Write.* London : Cassell & Company Ltd.

藤井　泰（2001）「イギリスのエリート学校体系　近代イギリスのエリート教育システム」『エリート教育』京都：ミネルヴァ書房。

福岡　隆（1978）『日本速記事始 ― 田鎖綱紀の生涯 ―』東京：岩波書店。

Hansard (1949) Fifth Series－Volume 462. London : Her Majesty's Stationery Office.

————(1953a) Fifth Series－Volume 511. London : Her Majesty's Stationery Office.

————(1953b) Fifth Series－Volume 515. London : Her Majesty's Stationery Office.

Harrison, Maurice (1986 [1971]) "A History of the Simplified Spelling Society up to 1970" *SSS Newsletter*, 1986 No.2 (Summer), pp. 22-25.

The House of Pitman (1930) London : Pitman.

Johnson, Rachel (2001) "A cleer case of educathunal lunacie" *Daily Telegraph*. 2 June 2002.

兼子次生（1999）『速記と情報社会』東京：中央公論社。

茅島　篤（2000）『国字ローマ字化の研究』東京：風間書房。

村岡健次・木畑洋一編（1991）『イギリス史３　近現代』東京：山川出版社。

Packham, David (1954) *The Australians of a Branch of the Pitman Family.* London : Pitman.
Pitman, Ben (1902) *Life and Labors of Sir Isaac Pitman.* Cincinnati.
Pitman, Charles (1920) *History of Pedigree of the Family of Pitman of Dunchideock, Exeter, and their Collaterals and the Pitmans of Alphington, Norfolk and Edinburgh.* London : Mitchell Hughes and Clarke.
Pitman, James. (n.d.) *Thoughts and Theories.* London : Pitman.
————(1937a) "Sir Isaac Pitman : 100 years of educational idealism".
————(1937b) "Pitman Centenary Celebrations : Mr I.J.Pitman's Speech" London : Pitman.
————(1939) *700 Common Words : A List of 700 Frequently Recurring Words and their Derivatives.* London : Pitman.
————(1959a) "Learning to Read : a Suggested Experiment." *The Times Educational Supplement*. 29 May 1959.
————(1959b) *The Ehrhardt Augmented (40-sound-42-character) lower case Roman Alphabet : the Reasons and Intentions Underlying its Design together with a Specimen.* London : Pitman.
————(1961) "Learning to Read : an Experiment." Reprinted from *The Journal of the Royal Society of Arts,* vol.109, no.5055, pp.149-180.
————(1965) "The Late Dr. Mont Follick—an Appraisal : the Assault on the Conventional Alphabets and Spelling" London : Pitman.
Pitman, James and John St John (1969) *Alphabets and Reading*. London : Pitman.
Read, Kingsley (1972) "Sound-writing 1892-1972 : George Bernard Shaw and a modern alphabet" *The Kingsley Read Alphabet Collection*. Reading : The Library, University of Reading.
Reed, T. A. (1890) *A Biography of Isaac Pitman.* London.
Ripman, Walter (1941) *A Dictionary of New Spelling.* London : Pitman.
Ripman, Walter and William Archer (1948) *New Spelling : Being Proposals for Simplifying the Spelling of English without the Introduction of New Letters.* 6th ed. Revised by Daniel Jones and Harold Orton. London : Pitman.
佐々木達・木原研三編（1995）『英語学人名辞典』東京：研究社。
Shaw, George Bernard (1962) *Androcles and the Lion.* The Shaw Alphabet Edition. Harmondworth : Penguin Books.
————(1963) *On Language.* Ed. by Abraham Tauber. New York : Philosophical Library.
竹林滋・桜井雅人（1985）『〈英語の演習　第 1 巻〉　音韻・形態』東京：大修館書店。

注

1) 「テレグラフ」,『スペクテーター』他に寄稿するジャーナリスト。
2) 初期指導用アルファベットの説明のなかで強調される点のひとつ。例えば Pitman（1961）p.14 参照。
3) 「幼児学校（infant school)」と「小学校（junior school)」は同じ敷地内に併設され，ひとつの学校であることも多い。合わせて「初等学校（primary school)」という。
4) Clark-Kennedy（1985）.
5) http : //news.bbc.co.uk/
6) この放送内容は http : //www/unifon.org/ita-radio.html で公開されている。
7) Bell（2001）p.26.
8) なお，祖父アイザック・ピットマンと，ジェームズ・ピットマンの混同については，ジャーナリズムだけに限ったことでもない。ブラッドリ（1904）にシメオン・ポッターが加筆した『英語発達小史』（1968)（寺澤芳雄訳，岩波文庫，1982 年）でも，祖父アイザック・ピットマンが初期指導用アルファベットを考案したと述べられている（p. 282)。ポッター加筆部分の思い違いであるが，特にこの点を訂正する訳注はない。アイザックも綴字改革に非常に熱心で，彼の改革案を実験的に学校教育で使用するという試みも実際にあったが，これと 1960 年代の「初期指導用アルファベット」とは直接的な関係は全くない。

9) またこの記事には，「ローマン・アルファベットの26文字に加えて，14の新字を使う」とあるが，この記述も事実とは異なる。その他，体験談として，「初期指導用アルファベットを使って書いたものは，まわりの大人には理解不可能だったので，暗号代わりに友達とのやりとりに使った」というようなコメントも紹介されているが，実際は通常の綴字で読み書きができる大人なら，初期指導用アルファベットが「解読できない」などということはあり得ないと思われる。まわりの大人の反応を子供が誇張して受けとめた事例ではないかと考えられる。

10) 初期指導用アルファベットの教育的側面よりも，英語学史的側面を重視して，取りあげるのには，私が専門的関心を抱く研究分野の違い，ということもあるが，その他に消極的な理由として，日本の英語教育において，この初期指導用アルファベットが影響を持たなかったこと，そしてこれからも持ち得ないであろうことがある。これは，日本の英語教育が綴字と発音の間の基本的な規則を教える「フォニックス」の方法を採らず，発音記号（もしくはカナ）を使うことが多いことと関係する。（竹林・桜井（1985），p.78参照）。また初期指導用アルファベットが，英語を母語とする子供もしくは，英語を外国語としながらもローマン・アルファベットを母語で用いる外国語話者を学習者として設定していることもある。

11) ブルシェ（1999）pp.204-208。私は1990年代初め，イギリスの大学院在学時にイングランドや南アフリカ共和国出身の学寮同窓生がi.t.a.の思い出について語り合うのを耳にして以来，この問題に漠然とした関心を持っていたが，今回のようなかたちで詳しく調べてみようと思うにいたった直接のきっかけは，本書『英語の正書法』を訳者の御一人である米倉綽先生からいただき，そのなかでi.t.a.が正書法改革の流れのなかで位置づけられているのを興味深く読んだことであった。この場を借りて，あらためて御礼申し上げたい。

12) Bailey (1991) p. 200.

13) Carney (1994) p. 487.

14) ブルシェ（1999） pp. 206-207.

15) Baker (1980), Pitman (1902). 及びReed（1890）。これらの刊行された伝記の他，バース大学図書館ピットマン・アーカイブには出版に至らなかったメアリー・アバークロンビー（デービッド・アバークロンビーの夫人）のアイザック・ピットマン伝の原稿も残っている。この原稿を読んだジェームズ・ピットマンが，この内容ではアイザックの勤勉で禁欲的なイメージが壊れる，と暗に出版を抑えたことが，ピットマンからメアリー・アバークロンビーへの手紙（1973年12月31日付）でうかがえる。なお現在準備中の*DNB*の次の版で，アイザック・ピットマンの項を執筆したトニー・トリッグズ（Tony T. Triggs）はこの原稿の内容をふまえた新しいアイザック像を描こうとしている。

16) Abercrombie (1965) p. 107.

17) 筆者の調べた範囲，およびピットマン・アーカイブの Lizzie Richmond氏，ジェームズ・ピットマンの長男Peter Pitman氏談。

18) ジョージ・ジョンストンはその父の起こした食品会社ボブリル（Bovril）を引き継いだ事業家であり，また慈善事業家としても著名（*DNB*, Johnston, George Lawson, first Baron Luke 1873-1943の項）。息子ヒュー・ジョンストン氏はボブリル社を次ぎ，ジョンストン家最後の世襲社長となる。同時に，一時は，ピットマン社関連五社を総括する親会社ピットマン・リミティドの会長も務めている。

19) 佐々木・木原編，（1995）p. 274。ジェームズ・ピットマンについては約200字の説明がある。もっとも，そのなかに「1964年にInitial Teaching Alphabetを初等教育用に考案発表し」とあるが，1964年というのは不正確。本稿四章で述べるように，イギリスでの初期指導用アルファベットの実験開始は1961年9月であり，考案自体が公に発表されたのは1959年（個人的な考案はそれ以前）に遡る。

20) http : //www.bath.ac.uk/library/webcat/

21) ロンドンのパーカー・ストリートとニュートン・ストリートの角にあったピットマン社の建物。二階がライブラリーになっていた。*The House of Pitman*（1930）pp.16-25参照。

22) Press Release, Bath Univeristy of Technology, Office of the Secretary and Registrar, 1970年1月13日。

University of Bath Archives PUB 8/5。

23) ピットマンの秘書ミス・ブリセット（Blissett）から彼の友人バレット夫人（Barrett）への1961年9月18日付の手紙。

24) アイザック・ピットマンはバースの東10マイルのところにあるトラウブリッジ（ウィルトシャー）で生まれ十八歳までを過ごす。そのあと，リンカンシャーやグロスタシャーの町で教職につくが，二十六歳のときにバースに移る。速記事業に専念するために教師をやめたあと，事業の拠点とした「フォネティック・インスティテュート」を設立，事業の拠点として，バース市内を中心部を何度か移転し，事業拡張に対応していく。

25) ピーター・ピットマン氏談（2002年8月20日午後，バース大学図書館にて）。また，1945年にジェームズが初めて下院議員に立候補した際の応援演説で，夫人も「彼が異常なまでに（in-ordinately [sic]）バースを誇りに思っていることがわかっていただけることと思います」と有権者に支持を訴えている（*Bath Chronicle,* 1945年4月20日）。

26) ピットマン一家が最初に入居したのは十二番地であるが，一家は1896年秋に十七番地に引っ越している。このときアイザックは病床にあり，翌年一月には亡くなっているので，実際アイザックが十七番地で過ごしたのはほんの数ヶ月ということになる。

27) Baker (1980) pp. 324, 328.

28) ピットマンからバレット夫人へ1966年8月5日付の手紙。

29) サー・アイザック・ピットマン・アンド・サンズ社の発展については *The House of Pitman*（1930）参照。とくにpp. 27-37にアルフレッドとアーネストの代で，アイザックの代の速記関連出版中心から発展していった経緯が述べられている。

30) *DNB*, "Pitman, Sir（Isaac）James 1901-1985".

31) ピーター・ピットマン氏談。

32) Pitman (1920) p. 14.

33) Packham (1954). Prologue (I. J. Pitman's Broadcast in the guest of honour programme. From Melbourne, 1st May 1949).

34) 藤井（2001）p.33。

35) *The Oxford Companion to the English Language,* "Pitman, Sir Isaac, James (1901-1985)".

36) ピットマンの秘書ミス・ブリセットからバレット夫人への1962年10月29日付の手紙。

37) ピットマンの秘書ミス・ブリセットからバレット夫人への1962年10月29日付の手紙。

38) *DNB,* "Pitman, Sir（Isaac）James 1901-1985".

39) *Encyclopedia Britannica* "George VI"の項。1939年以降は世情不安のため行われず，戦後も復活することはなかった。

40) 実際に初期指導用アルファベットの実験に参加したのは，比較的安定した家庭環境にある子供達が多く，ピットマンの意図したところへはつながらなかったのではないか，という指摘もある。（ピーター・ピットマン氏談）。一方，ジェームズ・ピットマンの意図した手応えを実際感じた教師も多い（元初等学校教員パット・キャンプ夫人，エルジー・オーキンソン夫人談）。

41) ジェームズ・ピットマンが事業に加わったころのサー・アイザック・ピットマン・アンド・サンズ社（Sir Isaac Pitman & Sons, Ltd）については *The House of Pitman*（1930）（参照）。

42) *DNB*, "Pitman, Sir (Isaac) James 1901-1985".

43) Pitman（1937a）及びPitman（1937b）。両者共バース大学ピットマン・コレクションのカタログに載っているが前者は実物が紛失している。.

44) 1945年の総選挙時の"The Election Address of Mr. I. J. Pitman."より。

45) ジェームズ・ピットマン（保守党）20196票，D. アーチボルド（労働党）18120票，P. ホプキンズ（自由党）7952票。

46) "Biographical details of SIR JAMES PITMAN K.B.E., M.A., M.P. with a note on the Initial Teaching Alphabet"

(n.d.) Pitman Collection 所蔵。

47) Clark-Kennedy (1985).

48) ピットマン・アーカイブにはジェームズ・ピットマンの下院議員としての活動を報じた新聞の切り抜きが，最初の数年分を中心に所蔵されている。

49) "MR.PITMAN ON 'EDUCATION' IMPLICATIONS OF NEW ACT DISCUSSED" *Bath Chronicle*. 17 February. 1945.

50) 村岡・木畑（1991）p.343。

51) *Oxford Companion to the English Language,* "Simplified Spelling Society short form SSS".

52) Harrison（1986）。この記事はもともと"A Short Account of Simplified Spelling and the Simplified Spelling Society"というタイトルで 1971 年発行の SSS のパンフレット No.11 に掲載されたものの再録である。

53) Harrison（1986）p.24.

54) この第六版は第五版に若干加筆した版で，第五版の前言と序文が用いられている。

55) ニュー・スペリングの例文は Ripman and Archer（1948）p.92 より引用。ニュー・スペリングの特徴について更に詳しくはブルシュ（1999）pp. 182-204 参照。

56) Brown (1995).

57) Bailey (1991) p. 199.

58) Shaw (1963) pp. vii-xii。編者のトーバーは，ニューヨーク市立大学ブロンクス・コミュニティ・カレッジのディーンであり，"Spelling Reform in the United States"という博士論文を 1958 年，コロンビア大学に出しており，綴字改革に強い関心を持っていた。

59) Collins & Mees（1999）p.365.

60) ピットマンからトーバーへ 1963 年 1 月 2 日付，トーバーからピットマンへ同年 1 月 25 日付の手紙。

61) トーバーからピットマンへ 1963 年 1 月 25 日付の手紙。

62) ブロック・レポート，ナショナル・カリキュラムなどに提言を行っている。内容はその都度 *Journal of Simplified Spelling Society* に掲載。

63) 近年では毎年 400 名以上の議員が籤に参加する。しかし特に強い関心をもった法案を準備しているわけでもなく，法案提出権を得た後，圧力団体などから法案の内容を提案されたり，起草の請負を申し出られたりする議員も少なくない。("Private Members' Bills Procedure HC Factsheets-Series L No 2" Parliamentary Copyright（House of Commons）2002. http : //www.parliament.uk.)

64) *Hansard* (1949), pp. 1612-1614.

65) *Hansard* (1949), pp. 1612-1670.

66) *Hansard* (1949), p.1600.

67) *Hansard* (1949), p.1618.このくだりは Shaw（1963）にも引用されている。前節で述べたように，トーバーによるこのショーの論集に，ピットマン寄りの視点が色濃く出ていることを示す一例である。

68) 第二読会（Second Reading）において。第一読会（First Reading）は，名称と番号のみで法案を議会に提出する形式的なものであり，実質的な法案の討議は第二読会で初めて行われる。第二読会を通過した法案は委員会に細部の審議が付託され（Committee State），再び議会で委員会報告が審議された（Report State）後，第三読会（Third Reading）が行われる。下院第三読会を通過した法案は，上院へと送られる。

なお，茅島（2000）によると 1940 年 3 月にも SSS は「英語の綴り字問題を考察するために委員を任命されるようにという請願書を英国首相に提出した」(p.186) という。

69) Pitman(1965)。これは，モント・フォリックの遺言により遺産が寄付されたマンチェスター大学で 1964 年 2 月 7 日に開かれた，モント・フォリック・レクチャー第一回としてジェームズ・ピットマンが行った講演内容をパンフレットとしたものである。

70) *Hansard* (1953a), p.2418.

71) Pitman (1965).

72) "The Success of Private Members' Bills, HC Factsheets-Series L No 3. Parliamentary Copyright (House of Commons)"
73) Pitman (1965) p. 7.
74) Pitman (1965) pp. 1-2.
75) Bailey (1991) では，フォリックの遺志を引き継ぐことになったマンチェスター大学側は「いささか困惑気味であった」(somewhat uneasily) と述べている (p.200)。
76) "The Mont Follick Library" *Journal of Simplified Spelling Society*, 1987 No1, p.18.
77) Shaw (1963) pp. 163-168.
78) Read (1972) p. 16.
79) Shaw (1963) p. 163.
80) Shaw (1963) pp. 171-2.
81) Shaw (1963) p. 170.
82) Read (1972) p. 18.
83) たとえばブルシェ (1999) p.211。
84) Shaw (1963) pp. 112-136 に再録。ただし，これは 1941 年のロンドンの版ではなくて，1948 年ニューヨークで出版された版のものである。1961 年 8 月 20 日付の *The New York Times Magazine* はこの序文の一部を掲載し，同年 9 月からイギリスで始まる初期指導用アルファベットとも関連させている。
85) Read (1972) pp. 13-16.
86) Read (1972) p. 18.
87) Read (1972) p. 19.
88) ピットマンからバレット夫人，マグラス氏，パグマイヤー氏への 1960 年 7 月 19 日付の手紙。
89) パグマイヤー氏から公認受託者レジナルド卿への 1961 年 3 月 1 日付の手紙。
90) ピットマンからバレット夫人への 1966 年 8 月 5 日付の手紙。
91) バレット夫人からピットマンへの 1962 年 10 月 21 日付及び 1963 年 2 月 2 日付の手紙。
92) パグマイヤー氏から公認受託者レジナルド卿への 1967 年 3 月 1 日付の手紙。
93) マグラス氏からピットマンへの 1960 年 7 月 15 日付の手紙。
94) ピットマンから遺産管理局のデイビス氏への 1961 年 4 月 14 日付の手紙。
95) ペンギンブックスからペーパーバック版 40000 部と，図書館等寄贈用のペーパーバックと同じサイズのハードカバー版「公認受託者版」13000 部が作られた (Read (1972) pp.21-22)。
96) "THIS BOOK IS DEDICATED TO SIR JAMES PITMAN K.B.E. M.P. in grateful acknowledgement of his unstinted co-operation and continuous support over a period of nine years in carrying out Bernard Shaw's wishes C.R.S. PUBLIC TRUSTEE 1962"
97) "SIR JAMES PITMAN, K. B. E., M. P. International authority on Shaw and alphabet and spelling reform"
98) ピットマンの秘書からトーバーへの 1963 年 2 月 25 日付の手紙。
99) Pitman (1959a).
100) Pitman (1959b).
101) "[The committee's] members were H. L. Elvin, Director of the University of London Institute of Education ; W. N. Niblett, Dean of the same Institute ; P. E. Vernon, Professor of Education Psychology at the same Institute ; W. D. Wall, Director of the National Foundation for Educational Research in England and Wales ; Joyce M. Morris, who was then in charge of reading research at the same Foundation ; Cyril Burt, Emeritus Professor of Psychology at University College, London ; D. B. Fry, Head of the Department of Phonetics, also at University College, London, and James Pitman, the devisor of i.t.a." (Downing, (1967) p. 81).
102) 十九世紀創立の大手鋳造植字機メーカー。活字書体 Times が有名。
103) ブルシェ (1999) p. 203 および p. 205 参照。
104) Biographial details of SIR JAMES PITMAN K. B. E., M. A., M. P. with a note on the Initial Teaching Alphabet.

(n. d.) Pitman Collection 所蔵。

105) Pitman (1965) p. 32.

106) Pitman & St. John (1969) p. 255.

107) Downing (1967) p. 79.

108) Pitman (1965) p. 33.

109) B.1895-d.1982。影響力のあった英国のカリグラファー。The Central School of Arts and Crafts で学ぶ。The Society of Scribes and Illuminators (1921 年設立) の設立メンバーの一人で，1952 年には the Society for Italic Handwriting 設立に初代会長として参加。1932 年出版の *A Hand Writing Manual* はイタリック体についてのテキストとして好評で版を重ねた。

110) Downing (1967) p. 75.

111) *The Case for Spelling Reform* というタイトルで 1965 年ピットマン社から出版されている。

112) *Hansard* (1949).

113) Downing (1967) pp. 68-75, 93-98.

114) ヴァイクの「規則化英語」の正書法改革としての理論的性格については，ブルシェ (1999) pp.182-204 参照。

115) Downing (1967) pp. 70-72.

116) Downing (1967) pp. 73-4.

117) Downing (1967) p. 75.

118) Downing (1967) pp. 94-98.

119) Downing (1967) p. 95.

120) Downing (1967) p. 96.

121) Downing (1967) p. 97.

122) Downing (1967) pp. 97-8.

123) Downing (1967) p. 68.

124) 私生活においては長男ピーター・ピットマン，次男マイケル・ピットマンのところに孫が誕生した年でもあった。ジェームズ・ピットマンは四人の子をもうけた。ピーター・ジョン・ピットマン (1928 年 3 月 24 日生まれ)，マイケル・アイアン・ピットマン (1931 年 3 月 17 日生まれ)，デイビッド・クリスチャン・ピットマン (1936 年 12 月 1 日生まれ)，マーガレット・ピットマン (1939 年 8 月 31 日生まれ) の三男一女である。

(2002 年 9 月 4 日受理)

(やまぐち　みちよ　文学部助教授)